

平成17(2005)年度

鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書

開地谷古墳群
野坂遺跡
良田所在遺跡
青谷上寺地遺跡
鳥取城三ノ丸跡
鹿野御茶苑所在遺跡
天神山遺跡
青谷大坪所在遺跡
高住銅鐸出土推定地

2006

鳥取市教育委員会

序 文

平成16年11月に鳥取市は周辺の8町村（国府町、福部村、河原町、用瀬町、佐治村、気高町、鹿野町、青谷町）と合併して人口20万人あまりを擁する新鳥取市として山陰地方の最大の都市になりました。

鳥取市内には、鳥取平野をはじめその周辺丘陵に、数多くの遺跡が存在しています。これらの埋蔵文化財は地域の先人たちの生活を語る歴史資料であり、後世に継承していくべき市民の貴重な財産です。このような認識のもと、鳥取市教育委員会では、各種開発と文化財の共存をはかるべく、各関係機関の協力を得ながら埋蔵文化財行政を進めています。

さて、今回の報告書は国及び県の補助金を受けて、平成16年度及び平成17年度に実施した鳥取市内遺跡の試掘調査記録です。ささやかな冊子ではありますが、市民各位ならびに関係各位の埋蔵文化財の理解に供していただければ幸いです。

おわりに、今回の発掘調査にあたり、ご理解とご協力をいただきました地元の皆様をはじめ関係各位の方々に、心から感謝申し上げます。

平成18年3月

鳥取市教育委員会

教育長 中川俊隆

例　　言

1. 本書は、平成16年度及び平成17年度に国・県の補助金を得て、鳥取市教育委員会が実施した発掘調査報告書である。
2. 調査を実施した遺跡は開地谷古墳群、野坂遺跡、良田所在遺跡、青谷上寺地遺跡、鳥取城三ノ丸跡、鹿野御茶苑所在遺跡、天神山遺跡、青谷大坪所在遺跡、高住銅鐸出土推定地である。なお青谷大坪所在遺跡は平成16年度調査時では大坪岸ノ上遺跡として調査を実施したが、昨年度及び今年度の調査により、別の遺跡として考え、大坪大繩手遺跡、大坪イカウ松遺跡とする。
3. 本書における遺構図のすべては磁北を示し、レベルは基本的に海拔標高である。
4. 青谷大坪所在遺跡のトレンチ番号は昨年度実施した大坪岸ノ上遺跡発掘調査からの通し番号である。
5. 植物珪酸体分析及び珪藻分析は(株)古環境研究所に委託した。
6. 高住銅鐸出土推定地の電磁法探査は応用地質(株)に委託した。
7. 第3章は分析結果をご寄稿いただいたものである。
 - ・年輪年代測定については独立行政法人奈良文化財研究所 光谷拓実先生に玉稿をいただいた。
 - ・植物珪酸体分析及び珪藻分析は(株)古環境研究所に委託した。
8. 発掘調査によって作成された記録類および出土遺物は、鳥取市教育委員会に保管されている。
9. 現地調査および本書の作成にあたり、以下の方々から指導、助言ならびに協力をいただき、厚く感謝いたします。(順不同、敬称略)
赤木 三郎、金原 正明、工楽 淳通、高安 克己、辻 誠一郎(以上青谷上寺地遺跡発掘調査委員会)光谷 拓実、鳥取県教育委員会事務局文化課、鳥取県埋蔵文化財センター
10. 発掘調査の体制は以下のとおりである。

発掘調査主体	鳥取市教育委員会
事務局	鳥取市教育委員会 文化財課
調査担当	前田 均、谷口 恵子、藤本 隆之、平川 誠、加川 崇

本 文 目 次

序文・例言

第1章 はじめに

I. 実地調査の契機と調査の目的	1
II. 実地調査の経過	1

第2章 調査の結果

I. 開地谷古墳群	3
II. 野坂遺跡	5
III. 良田所在遺跡	7
IV. 青谷上寺地遺跡	8
V. 鹿野御茶苑所在遺跡	11
VI. 鳥取城三ノ丸跡	12
VII. 天神山遺跡	18
VIII. 青谷大坪所在遺跡 (青谷大坪イカウ松遺跡、青谷大坪大绳手遺跡)	22
IX. 高住銅鐸出土推定地	27

第3章 付章

I. 青谷大坪岸ノ上遺跡出土木材の年輪年代測定	29
II. 青谷大坪岸ノ上遺跡の自然科学分析	30

写真図版

報告書抄録

挿 図 目 次

第1図	調査位置図	2
第2図	開地谷古墳群 調査トレンチ配置図	3
第3図	開地谷古墳群 第1・2・3トレンチ実測図	4
第4図	開地谷古墳群 第3トレンチ出土遺物実測図	5
第5図	野坂遺跡 調査トレンチ配置図	5
第6図	野坂遺跡 第1トレンチ実測図	6
第7図	野坂遺跡 第1トレンチ出土遺物実測図	6
第8図	良田所在遺跡 調査トレンチ配置図	7
第9図	良田所在遺跡 第1トレンチ実測図	8
第10図	良田所在遺跡 第1トレンチ出土遺物実測図	8
第11図	青谷上寺地遺跡 調査トレンチ配置図	9
第12図	青谷上寺地遺跡 第1トレンチ出土遺物実測図	9
第13図	青谷上寺地遺跡 第1トレンチ実測図	10
第14図	鹿野御茶苑所在遺跡 調査トレンチ配置図	11
第15図	鹿野御茶苑所在遺跡 第1トレンチ実測図	12
第16図	鳥取城三ノ丸跡 調査トレンチ配置図	13
第17図	鳥取城三ノ丸跡 第1トレンチ実測図	14
第18図	鳥取城三ノ丸跡 第1トレンチ出土遺物実測図	15
第19図	鳥取城三ノ丸跡 第2トレンチ実測図	16
第20図	鳥取城三ノ丸跡 第2トレンチ出土遺物実測図	17
第21図	天神山遺跡 調査トレンチ配置図	19
第22図	天神山遺跡 第1・2トレンチ実測図	20
第23図	天神山遺跡 第1トレンチ出土遺物実測図	21
第24図	天神山遺跡 第2トレンチ出土遺物実測図	21
第25図	青谷大坪所在遺跡 調査トレンチ配置図	23
第26図	青谷大坪所在遺跡 第15・16・17トレンチ実測図	24
第27図	青谷大坪所在遺跡 第19・21トレンチ実測図	25
第28図	青谷大坪所在遺跡 第18・20・22トレンチ断面図	26
第29図	青谷大坪所在遺跡 第16・18・19・20・21トレンチ出土遺物実測図	26
第30図	高住銅鐸出土推定地調査位置図	28
第31図	サンプル採取位置図	33
第32図	第1トレンチにおける植物珪酸体分析結果	35
第33図	第9トレンチにおける植物珪酸体分析結果	36
第34図	青谷大坪岸ノ上遺跡における主要珪藻ダイアグラム	38

表 目 次

表1 青谷大坪岸ノ上遺跡出土木材の年代測定結果	29
表2 青谷大坪岸ノ上遺跡の植物珪酸体分析結果	34
表3 青谷大坪岸ノ上遺跡における珪藻分析結果	37

図版目次

図版1…開地谷古墳群 調査地遠景	天神山遺跡 第1トレンチ完掘状況
開地谷古墳群 第2トレンチ完掘状況	天神山遺跡 第1トレンチ北壁断面
開地谷古墳群 第2トレンチ上方断面	天神山遺跡 第1トレンチ深掘部断面
開地谷古墳群 第2トレンチ下方断面	天神山遺跡 第2トレンチ完掘状況
開地谷古墳群 第1トレンチ完掘状況	天神山遺跡 第2トレンチ南壁断面
開地谷古墳群 第1トレンチ下方断面	図版8…天神山遺跡 第2トレンチ コンクリートブロック検出状況
開地谷古墳群 第3トレンチ調査前	天神山遺跡 第2トレンチ十脚柱検出状況
開地谷古墳群 第3トレンチ断面	青谷大坪所在遺跡 調査地遠景
図版2…野坂遺跡 調査地遠景	青谷大坪所在遺跡 Tr-15完掘状況
野坂遺跡 調査前	青谷大坪所在遺跡 Tr-15西壁断面
野坂遺跡 第1トレンチ北壁断面	青谷大坪所在遺跡 Tr-16完掘状況
野坂遺跡 第1トレンチ東壁断面	青谷大坪所在遺跡 Tr-16東壁断面
野坂遺跡 第1トレンチ東壁断面	青谷大坪所在遺跡 Tr-16木製品出土状況
野坂遺跡 第1トレンチP-01断面	図版9…青谷大坪所在遺跡 Tr-17北壁断面
野坂遺跡 第1トレンチP-07断面	青谷大坪所在遺跡 Tr-17木製品出土状況
野坂遺跡 第1トレンチP-04断面	青谷大坪所在遺跡 Tr-18東壁断面
図版3…良田所在遺跡 調査地遠景	青谷大坪所在遺跡 Tr-18南壁断面
良田所在遺跡 調査前	青谷大坪所在遺跡 Tr-19完掘状況
良田所在遺跡 第1トレンチ完掘状況	青谷大坪所在遺跡 Tr-19北壁断面
良田所在遺跡 第1トレンチ溝状遺構SD-01検出状況	青谷大坪所在遺跡 Tr-19 SK-01 検出状況
良田所在遺跡 第1トレンチP-01検出状況	青谷大坪所在遺跡 Tr-20東壁断面
良田所在遺跡 調査後	図版10…青谷大坪所在遺跡 Tr-20南壁断面
青谷上寺地遺跡 調査地遠景	青谷大坪所在遺跡 Tr-21東壁断面
青谷上寺地遺跡 表土除去作業	青谷大坪所在遺跡 Tr-21北壁断面
図版4…青谷上寺地遺跡 上層 溝状遺構検出状況	青谷大坪所在遺跡 Tr-21柱根検出状況
青谷上寺地遺跡 完掘状況	青谷大坪所在遺跡 Tr-22完掘状況
青谷上寺地遺跡 第1トレンチ東壁断面	青谷大坪所在遺跡 Tr-22北壁断面
青谷上寺地遺跡 第1トレンチ下層遺物出土状況	高住銅鐸出土地 調査地遠景
鹿野御茶苑所在遺跡 調査地遠景	高住銅鐸出土地 調査風景
鹿野御茶苑所在遺跡 調査前	図版11…開地谷古墳群 第3トレンチ出土遺物
鹿野御茶苑所在遺跡 第1トレンチ完掘状況	野坂遺跡 第1トレンチ出土遺物
鹿野御茶苑所在遺跡 第1トレンチ南東壁断面	良田所在遺跡 第1トレンチ出土遺物
図版5…鳥取城三ノ丸跡 調査地遠景	青谷上寺地遺跡 第1トレンチ出土遺物
鳥取城三ノ丸跡 第1トレンチ西壁断面	鳥取城三ノ丸跡 第1トレンチ出土遺物
鳥取城三ノ丸跡 第1トレンチSD-01	鳥取城三ノ丸跡 第2トレンチ出土遺物
鳥取城三ノ丸跡 第1トレンチ礫石1	図版12…鳥取城三ノ丸跡 第2トレンチ出土遺物
鳥取城三ノ丸跡 第1トレンチSD-01横断面	天神山遺跡 第1トレンチ出土遺物
鳥取城三ノ丸跡 第2トレンチ礫石2	天神山遺跡 第2トレンチ出土遺物
鳥取城三ノ丸跡 第2トレンチ集石、列石、SD-01	青谷大坪所在遺跡 Tr-16出土遺物
図版6…鳥取城三ノ丸跡 第1トレンチ完掘(1次)	青谷大坪所在遺跡 Tr-18出土遺物
鳥取城三ノ丸跡 第1トレンチ完掘(最終)	青谷大坪所在遺跡 Tr-19出土遺物
鳥取城三ノ丸跡 第2トレンチ完掘(1次)	図版13…青谷大坪所在遺跡 Tr-20出土遺物
鳥取城三ノ丸跡 第2トレンチ完掘(最終)	青谷大坪所在遺跡 Tr-21出土遺物
図版7…鳥取城三ノ丸跡 第2トレンチ完掘東壁下サブトレンチ断面	青谷大坪所在遺跡 T1出土遺物(平成16年度調査) 年輪年代測定試料
鳥取城三ノ丸跡 第2トレンチ北壁断面	
天神山遺跡 調査地遠景	

第1章 はじめに

鳥取市は県東部に位置し、面積765.66km²、人口20万人余りを擁する県庁所在地である。平成16年11月に旧鳥取市周辺の郡都町村（岡府町、福部村、河原町、用瀬町、佐治村、氣高町、庵野町、青谷町）との市町村合併が成立し、面積、人口ともに大きく増加した。

このような背景のなか、鳥取市内には数多くの遺跡が存在する。これまでの遺跡分布調査により4,600ヶ所以上の古墳、遺物散布地等が確認されるとともに現在も増加の一途をたどっている。近年、各種開発事業は落ち着き傾向にあるものの、未だ開発事業計画との調整が必要となる遺跡も数多くある。

I. 発掘調査の契機と調査の目的

今回報告する開地谷古墳群は墓地公園造成、野坂遺跡は携帯電話基地局鉄塔整備計画、良田所在遺跡は墓地造成、青谷上寺地遺跡は工場搬入路敷設、鳥取城三ノ丸跡は学校施設整備、庵野御茶苑所在遺跡は携帯電話基地局鉄塔整備計画、天神山遺跡は学校施設整備、青谷大坪所在遺跡はほ場整備計画、高住銅鐸出土推定地は真砂土採取計画に伴い発掘調査を実施し、開発事業との調整を図ったものである。

II. 発掘調査の経過

発掘調査は各遺跡ともトレーニングによる遺構、遺物の包含状況の確認に主眼をおいて実施した。試掘調査という性格上、基本的に調査後には埋め戻し作業を実施している。出土した遺物と写真や図面などの記録類の整理は現地調査と並行して進め、遺物については、水洗い等の後、注記等を行なった。すべての現地調査終了後、本格的に整理作業、報告書作成を行い、平成18年2月末に終了した。調査した遺跡の総面積は386.82m²である。

開地谷古墳群の現地調査は、平成17年5月10日から5月16日まで、3本のトレーニングを設定して実施した。調査の結果、周知古墳の裾部、周溝を確認するとともに過去の踏査で見落とされていた古墳を確認した。調査面積は38.5m²である。

野坂遺跡の現地調査は、平成17年5月17・18日、1ヶ所のトレーニングを設定して実施した。調査の結果、客土下より古代・中世期の土器類と柱穴、ピット状遺構を数基確認した。調査面積は15.0m²である。

良田所在遺跡の現地調査は、平成17年7月6・7日、1ヶ所のトレーニングを設定して実施した。調査の結果、詳細な時期は不明であるが、奈良期前後と考えられる2面の遺構面が存在しており、溝状遺構、ピット状遺構を確認した。調査面積は6.25m²である。

青谷上寺地遺跡の現地調査は、平成17年7月21・22日、1ヶ所のトレーニングを設定して実施した。調査の結果、近世以降の溝状遺構、奈良・平安期の遺物を確認した。調査面積は55.2m²である。

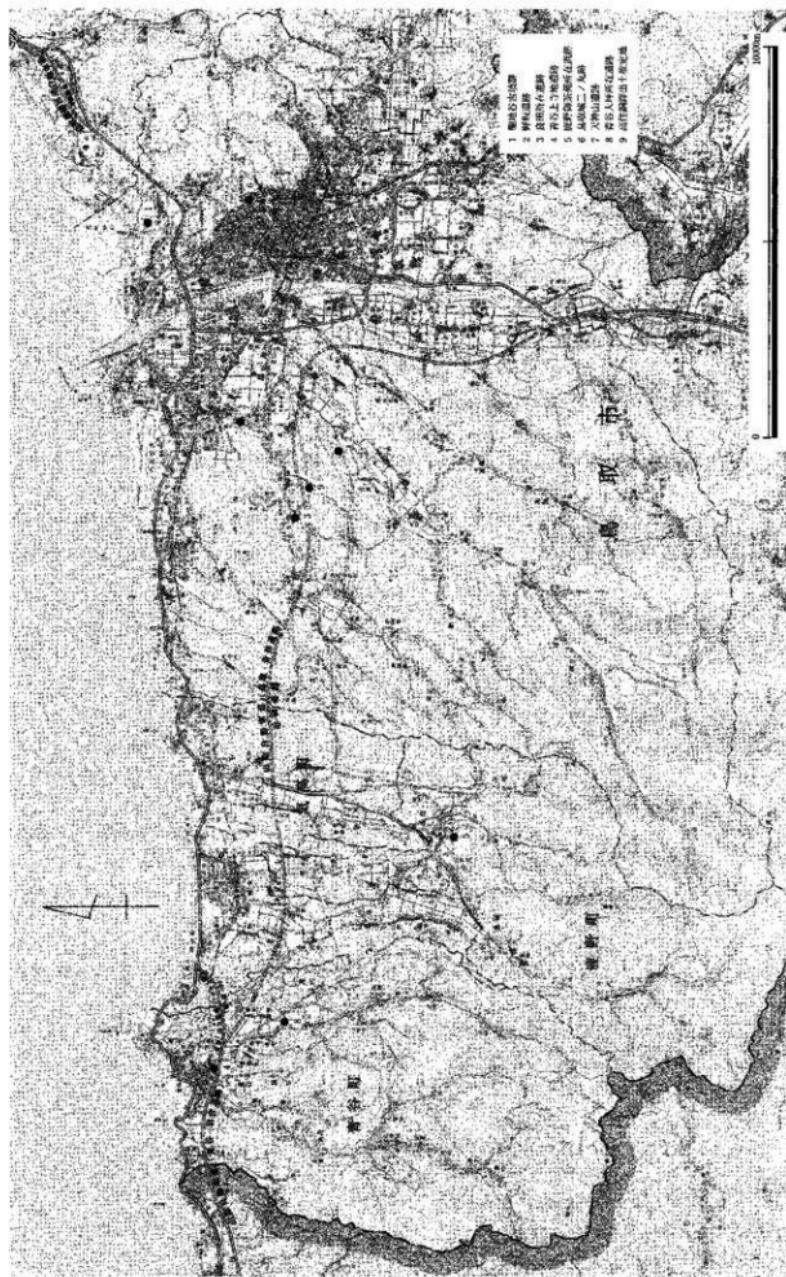
庵野御茶苑所在遺跡は、平成17年9月21日から9月27日まで、1ヶ所のトレーニングを設定して実施した。調査の結果、近代の溝状遺構、ピット状遺構を確認した。調査面積は16.0m²である。

鳥取城三ノ丸跡は、平成17年8月2日から10月26日まで、2ヶ所のトレーニングを設定して実施した。調査の結果、礎石、ピット、土坑、溝状遺構、列石遺構、集石遺構、整地層などを確認した。調査面積は40.0m²である。

天神山遺跡は、平成17年9月27日から10月21日まで、2ヶ所のトレーニングを設定して実施した。調査の結果、第2トレーニングで天神山城の堀の最深部と炭化層に伴う上師皿等を確認した。調査面積は42.67m²である。

青谷大坪所在遺跡の現地調査は平成17年12月5日から平成18年1月31日まで、8ヶ所のトレーニングを設定して実施した。調査の結果、青谷大坪イカウ松遺跡では旧河道左岸の川岸付近に存在すると考えられる木製品包含層を、旧河道右岸の青谷大坪大綱手遺跡では中世期と考えられるピット（柱穴）を検出した。調査面積は173.2m²である。

高住銅鐸出土推定地の現地調査は平成18年2月7日から2月9日まで、電磁法探査を実施した。調査の結果、銅鐸と考えられる反応を確認することはできなかった。調査面積は2,537m²である。



第1圖 調查地位置圖

第2章 調査の結果

I. 開地谷古墳群

1. 遺跡の位置と環境〔第1図〕

開地谷古墳群はJR鳥取駅より北へ3.8kmの鳥取市中心北部、浜坂に所在する。通称「鳥打山」と称される丘陵は、北側には鳥取砂丘、日本海を望み、南西側には鳥取平野を一望することができる。近隣は観光開発や宅地造成により、その様相は変貌しつつある。古墳群は過去の踏査等により、現在までに78基以上の古墳が確認されている。その大半はゴルフ場となっており、造成時に8基について発掘調査が実施され、中心埋葬施設が箱式石棺であること、5~6世紀の築造であることが確認されている。

近隣の古墳群には南東700mに覚寺古墳群、南東1.1kmに円護寺古墳群、南1.4kmに雁金山古墳群、西2.2kmに荒神山横穴墓群などがある。古墳時代の集落遺跡としては南南東1.7kmに小規模ながら、古墳時代後期頃の堅穴住居や掘立柱建物が10数棟確認されている円護寺坂ノ下遺跡などが存在する。覚寺古墳群は13基の古墳で構成されている。平成元年に道路建設に伴い7基の調査が実施され、前期末から中期前半に比定される初期古墳群と7~8世紀頃の終末期古墳群の2群が存在することが確認されている。円護寺古墳群では15基の古墳が確認されている。昭和57年、平成11・12年度に宅地造成、道路整備に伴う調査が実施されており、現在までに20基足らずの古墳が調査されて古墳時代後期の所産であることが確認されている。昭和39年、採砂場にて発見された浜坂横穴墓群は30穴にも達し、古墳時代終末期を考えるうえで貴重な遺跡である。

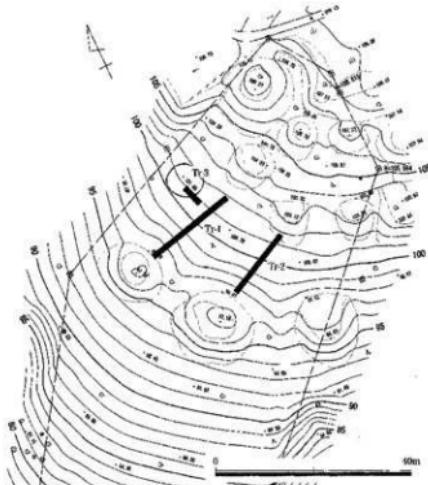
2. 調査の概要〔第2図〕

今回の調査は民間の墓地造成計画に伴って実施したものである。開発予定地は標高97~102m、傾斜15°程度の緩斜面となっており、踏査では古墳は確認されておらず、明確なマウンドも認められなかつた。予定地周辺の上方と下方には明らかな古

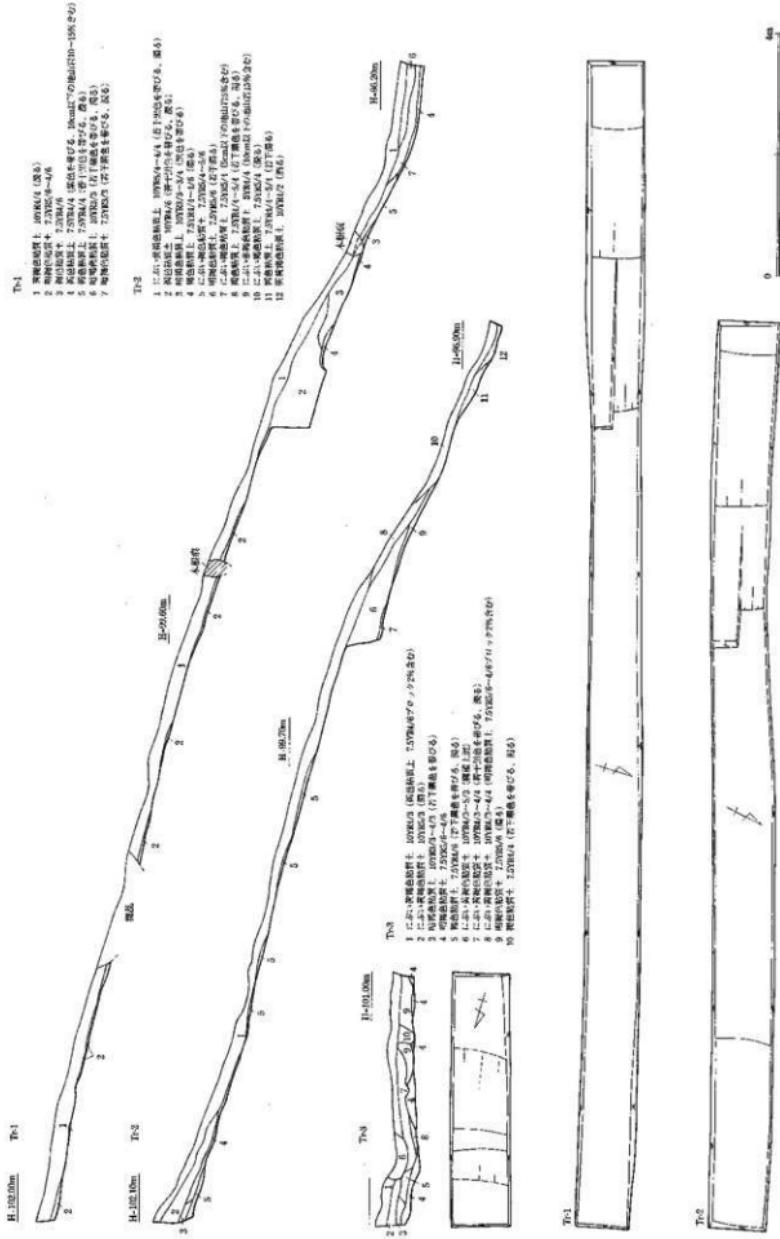
墳が存在しており、それらの古墳の墳裾、周溝の規模を確認することに主眼をおいてトレーナーを2本設定した。また、予定地北西端に踏査では見落とされていたであろう僅かなマウンドが存在し、周辺には須恵器の散布が認められ、古墳である可能性があるためトレーナー1本を追加した。

第1トレーナー(Tr-1)〔第3図、図版1〕

開発予定地のほぼ中央を縦断し、下方の古墳(開地谷26号墳?)の周溝肩部および埋土堆積状況を確認するため設定した1×19.3mのトレーナーである。緩斜面は表土下に直ぐ地山となり、遺構・遺物の存在は認められなかつた。下方古墳の周溝肩部は現況において、上方から大きく傾斜の変換が認められるものの、周溝埋土の堆積状況は意外と浅く極めて遺存状況が良好であることが窺える。



第2図 開地谷古墳群 調査トレーナー配置図



第3図 開地谷古墳群 第1・2・3トレンチ実測図

第2トレンチ(Tr-2) [第3図、図版1]

予定地の南東側を縦断し、上方古墳(開地谷25号墳?)の墳裾、下方古墳(開地谷27号墳?)の周溝肩部および周溝埋土堆積状況を確認するため設定した1×15mのトレンチである。緩斜面は表上下に直ぐ地山となり、遺構・遺物の存在は認められなかった。上方古墳は旧表土と考えられる層位の上に盛土が確認でき、墳裾は僅かに地山を切削して整形している。下方古墳の周溝肩部は、第1トレンチ同様、大きな傾斜の変換が認められるものの、周溝埋土の堆積状況は浅く極めて遺存状況が良好であることが窺える。

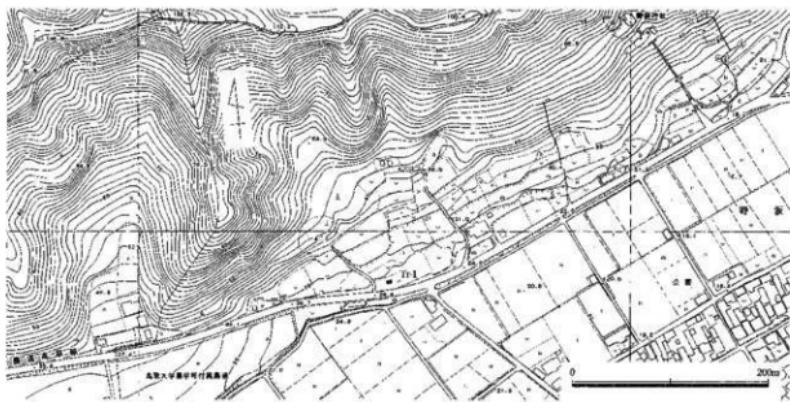
第3トレンチ(Tr-3) [第3・4図、図版1・11]

予定地北東端、僅かなマウンド状地形の中心部に向けて、標高100~101mの等高線にはば平行する1×4.2mのトレンチである。古墳であるか否かを確認するため設定した。トレンチ中央付近には周溝と考えられる堆積を確認するが、攪乱坑と重複するため不明瞭である。須恵器口縁部片(1)、石棺材が出土している。マウンド状地形は墳丘と考えられ、盛土らしい堆積も認められるが、設定したトレンチが狭小なこと、木根と重複することなどから明瞭ではない。

3. 小 結

過去の踏査により確認されている古墳の墳裾、周溝を確認した。周溝内の埋土の堆積も浅く古墳の遺存状況が良好なため、踏査で把握されている規模とほぼ一致する。踏査で未確認の古墳が存在する可能性もあり、注意を要する。

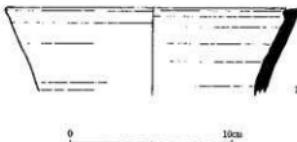
II. 野坂遺跡



第5図 野坂遺跡 調査トレンチ配置図

1. 遺跡の位置と環境 [第1図]

野坂遺跡はJR鳥取駅より西南西へ5kmの野坂に所在する。北西、南東側を丘陵に挟まれた谷部に位置しており、谷部中央には野坂川が流れ千代川へと注ぐ。遺跡は野坂川左岸、野坂集落の北西側、丘陵麓の段丘上田畑に存在する。昭和52年の分布調査において、弥生・古墳時代の遺物の散布が確認されて



第4図 開地谷古墳群
第3トレンチ出土遺物実測図

いる。

近隣には、野坂川を挟んだ南東側丘陵部に小森山遺跡、下段遺跡、北東1.5kmの谷平野部には大柄遺跡などが存在する。昭和52年の分布調査において、小森山遺跡は奈良・平安時代、下段遺跡は弥生・古墳時代の遺物の散布地として確認されている。大柄遺跡は昭和51年、圃場整備事業中に発見され、昭和52・57年には道路整備に伴い発掘調査が実施されている。弥生時代中期から奈良時代の複合遺跡で竪穴式住居、掘立柱建物、土坑、溝状遺構が確認されている。

また、地元の方々の話では、調査地の北東約70mには明治期の古窯跡、山麓一帯には粘土採掘跡があったという。いずれも現在では竹林や畑になっている。

2. 調査の概要（第5図）

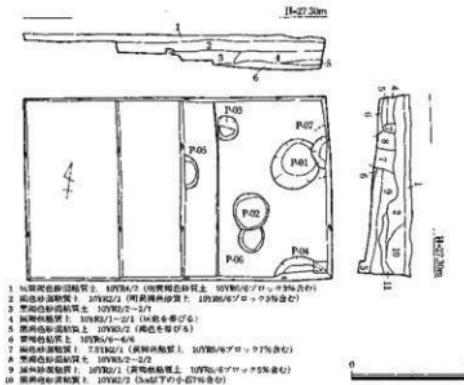
今回の調査は民間の携帯電話基地局鉄塔設置整備計画に伴って実施したものである。対象地は狭小であるため、遺構・遺物の包含の有無に注眼をおき、1本のトレンチを設定した。調査後は埋め戻しを行なった。

第1トレンチ（Tr-1）（第6・7図、図版2・11）

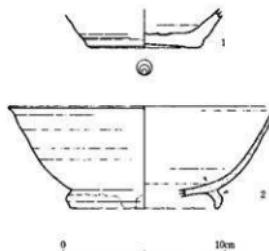
標高27m前後の畠地に設定した3×5mのトレンチである。耕作土を含め25~30cmの客土が認められ、客土下は基本的に、4. 黒褐色粘質土10YR3/1~2/1（灰色を帯びる）、5. 黒褐色砂混粘質土10YR3/2（褐色を帯びる）、6. 黄褐色粘質土10YR5/6~8/6と続く。第6層は地山と考えられる。客土および第4層は古代・中世の遺物を包含する。柱穴・ピット状遺構は第4層上面、標高26.5mから掘り込まれるものと第5層上面、標高26.2mから掘り込まれるものとが存在する。第4層上面から掘り込まれる遺構は埋土の状態から新しい時期の所産である可能性もある。7.2m²の範囲で計7基を検出した。遺構の規模は径40~60cm、深さ15~20cm程度のものが主である。埋土は概ね黑色系粘質土で6層のブロックを多少含む。遺構内から遺物は出土せず、詳細な時期は不明であるが、第4・5・9層は包含層であり、遺物の時期が比較的限定されるところから古代～中世の所産と考えて大過ないと思われる。（1）は上師器の杯底部で糸切痕を有する。（2）は灰釉陶器の高台付碗。検出した遺構が建物などの構造物を構成するか否かは、調査面積が狭小ゆえに不明である。

3. 小結

対象地は從来の遺跡分布図からは野坂遺跡の西限と考えられるが、標高26.5m以下で古代・中世の柱穴・ピット状遺構が多数存在する。また、古代山陰道が付近を通過していた可能性も考えられており、当該地および付近の開発等には注意を要する。



第6図 野坂遺跡 第1トレンチ実測図



第7図 野坂遺跡
第1トレンチ出土遺物実測図

III. 良田所在遺跡

1. 遺跡の位置と環境〔第1図〕

良田所在遺跡は湖山池中央の南岸、JR鳥取駅より西へ約7kmの良田に所在する。北を湖山池、南を丘陵に挟まれた狭小な谷部に位置する。緩傾斜地田畠には表面観察において多量の土器の散布が確認でき、遺跡の存在が明らかになったが、今までに具体的な調査は実施されていない。複雑に入組んだ丘陵尾根上には、古墳が密集しており、前方後円墳が比較的多い。東側に位置する高住集落との間には比較的大きな谷平野が存在しており、東400mに湧泉を中心には弥生から古墳時代の祭祀遺跡と考えられる塞ノ谷遺跡が存在する。塞ノ谷遺跡から400m北の湖山池に浮かぶ青島からも縄文から弥生期の遺物の散布や勾玉が出土している。また、高住集落の南側300mの丘陵から銅鐸が出土している。少し距離は離れるが、南西1.3kmには弥生時代から中世期の集落遺跡である松原谷田遺跡がある。東北東約2km



第8図 良田所在遺跡 調査トレンチ配置図

の桂見地区には縄文時代の丸木船が出土した桂見遺跡などがある。このように、とりわけ湖山池周辺は、湖畔という特別な環境ゆえに祭祀や墳墓、城跡など特殊な性格の遺跡が多数存在している。特に東岸、南岸に遺跡が集中する傾向が見られる。さらに、付近は交通の要衝でもあり注目される地域である。

2. 調査の概要〔第8図〕

今回の調査は個人の墓地造成に伴って実施したものである。対象地は狭小であるため、壁面の崩落に注意しながら造構・遺物の包含の有無に主眼をおき、1本のトレンチを設定した。調査後は丁重な埋め戻しを行なった。

第1トレンチ (Tr-1) [第9・10図、図版3・11]

標高4.1m前後の谷部、畠地に設定した2.5×2.5mのトレンチである。耕作土を含め、40cm程度の盛土が認められる。耕作土、盛土中には陶器片・土器細片を多量に含む。純粹な層位としては、標高3.8~3.5mの4.灰褐色シルト層10YR4/3、9.にぶい黄褐色シルト層10YR4/3以下となる。遺物包含層は2層存在しており、標高3.6mからの10.黒褐色粘質土7.5YR3/1~3/2、標高3.5mからの5.灰

褐色粘質土10YR4/1~4/2であり、それぞれの層位以下から遺構が掘り込まれる。包含層としては第10層の方が遺物量は豊富である。(1)は製塩土器、内面に布目痕を有する。(2)は須恵器の高台付杯。概ね古墳時代後期から奈良時代頃の土器類を包含する。第5層の遺物量は少なく、詳細な時期は不明である。標高3.4~3.3m以下の暗灰黄色粘土2.5YR5/2は鉄分を多量に含み、総体的に黄色を帯びる。遺物は含まず、基盤的な層位と考えられる。

遺構は第10層下の標高3.5mで溝状遺構 (SD-01) 1条、ピット状遺構 (P-01) 1基を検出した。SD-01は幅48cm、深さ19cmを測る。埋土は單一層で褐色粘質土7.5YR4/1~3/1となり、にぶい褐色粘土7.5YR5/4ブロック2%、僅かの鉄分・炭化物含む。遺物は須恵器片などの土器細片を僅かに含む。調査地が狭小なため、極僅かの検出であるが概ね東西方向に延びると考えられる。また、第4・5層下の標高3.3mでピット状遺構 (P-02) 1基を検出している。P-01、02ともに規模は似ている。時期、性格などの詳細は不明であるが、集落跡に伴う遺構とみて大過なかろう。

3. 小結

湖山池周辺は特殊な性格の遺跡が多く存在しており、調査地周辺の丘陵には多数の墳墓などが存在している。今回の調査では時期は下ると考えられるが、標高3.3~3.5mで2面の遺構検出面から溝状遺構やピット状遺構を検出しており、集落跡の可能性なども考えられる。湖山池周辺は丘陵のみならず、谷部の開発にも充分な注意が必要である。

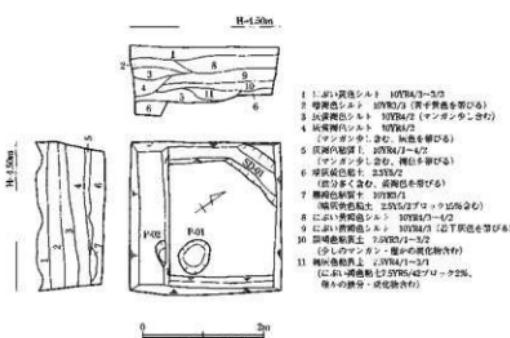
V. 青谷上寺地遺跡

1. 遺跡の位置と環境 [第1図]

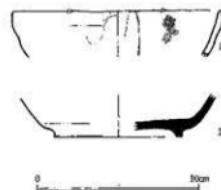
青谷町は鳥取市の西端に位置し、東西約7.7km、南北13kmと南北に長く、面積68.3km²の町である。

町の南側は丘陵で、そこから北へ伸びる溶岩台地が町の東西に取り附み町界を成している。町の東を日置川、西を勝部川が流れ、河口近くで合流し日本海に注いでいる。合流点付近に沖積平野、海岸部に砂丘が形成されている。

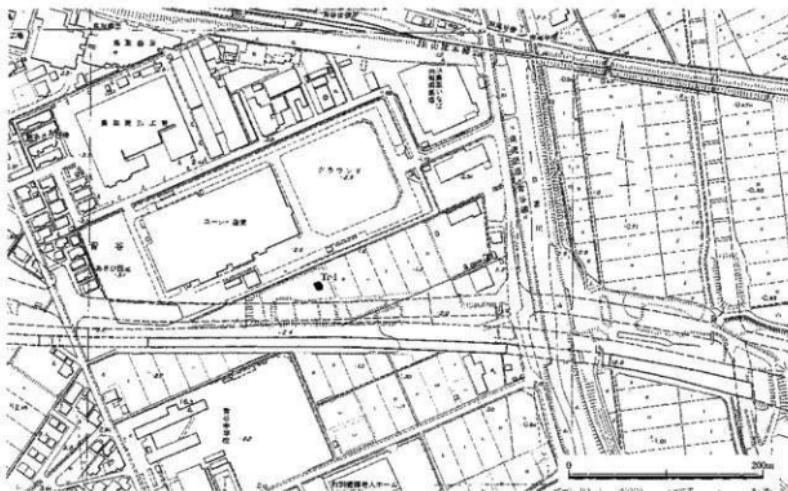
町内の遺跡は確認されているだけでも約450ヶ所あり、大半は古墳である。青谷上寺地遺跡はJR青谷駅の南側、青谷町の西側を流れる日置川の合流点付近に位置する。平成9年から平成16年にかけて、旧青谷町と鳥取県による試掘調査、確認調査が断続的に実施されている。遺跡は縄文時代から古墳時代に



第9図 良田所在遺跡 第1トレンチ実測図



第10図 良田所在遺跡
第1トレンチ出土遺物実測図

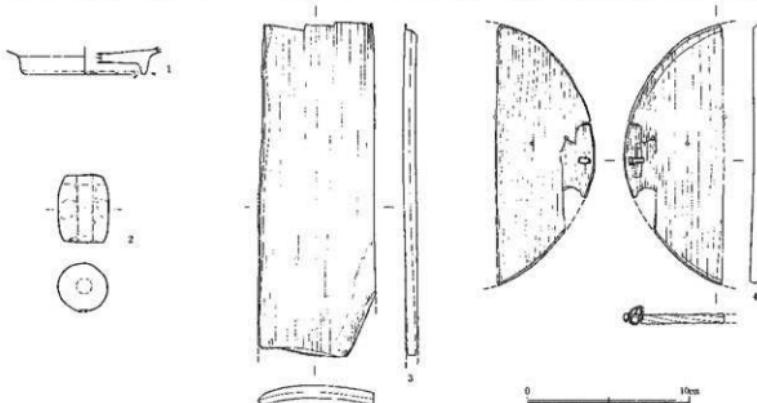


第11図 青谷上寺地遺跡 調査トレンチ配置図

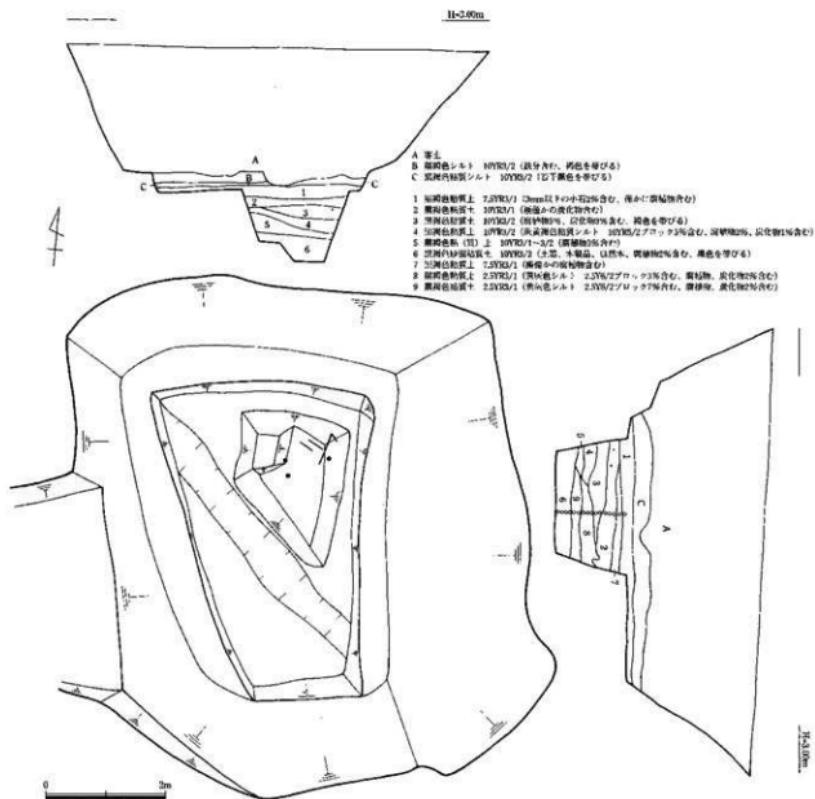
かけての複合遺跡で、なかでも遺跡の中心となる弥生時代後期の大規模な護岸施設や祭祀場跡、水出跡の遺構が検出されている。遺物は多量の土器類のほか、農耕具、漁撈具、建築材、卜骨、金属製品などが数多く出土している。弥生時代後期の溝内からは約5,300点にのぼる多量の人骨が出土し、なかには殺傷痕のある人骨も確認されている。出土した頭蓋骨3点の中には「脳髄」が遺存しており、全国的にも注目を集めめた。

2. 調査の概要 [第11図]

今回の調査は民間工場の搬入路敷設に伴う確認調査である。対象地には多量の客土及び近隣のボーリング調査から脆弱な地盤であることが確認されており、客土除去と調査の迅速化を図るために、重機と人



第12図 青谷上寺地遺跡 第1トレンチ出土遺物実測図



第13図 青谷上寺地遺跡 第1トレンチ実測図

力による掘削を併用することとした。壁面崩落を防止するため、段状に掘り下げることと緩傾斜の法面を設けることで対応した。また、水田跡の可能性なども考慮して将来的に分析を実施する予定で土壤サンプリングを行なった。

第1トレンチ (Tr-1) [第12・13図、図版3・4・11]

標高2.5mの予定地内に設定した6.9×8.0mのトレンチである。客土については重機を用いて除去した。現地表から約2m下まで客土がなされており、客土の重量にて地盤が若干沈下している。客土除去後は人力で掘削作業を行なった。客土下、標高0.5～0.2mは黒褐色（粘質）シルト10YR3/2となり、旧耕作土と考えられる。直下より耕地整理（明治頃）前の溝状造構を検出した。標高0.2～0.1mは基本的に黒褐色粘質土が続き下位層には腐植物が多く混ざる。標高-0.7～-0.8mで6. 黒褐色砂泥粘質土10 YR3/2となり、木製品、土器、自然木、腐植物を含む。下位ほど砂の混入が多くなる。標高-1.1m前後で湧水が著しくなり、以下の掘削は断念せざるを得なかった。トレンチが余りにも狭小ゆえに確認はできなかつたが、第6層は溝状造構や溜状造構の埋上の可能性も考えられる。曲物蓋板(4)、須恵器

片が出土しており、概ね奈良・平安期頃と考えられる。将来的にプラントオパール等の分析試料として連続した土壌サンプルを16点採取して保管している。

3. 小 結

標高0.3mで近世以降の溝状遺構を検出。トレーンチが狭小ゆえに断定はできないが、標高-0.7mから第6層は遺構埋土と考えられ、奈良・平安期頃の遺物が出土しており、調査地は遺跡の範囲内と評価できる。しかし、本来、遺跡の主となる弥生時代の遺構、遺物に関しては、標高-1.1m以下に存在すると考えられ、開口掘削の限界であり、確認することはできなかった。

V. 鹿野御茶苑所在遺跡

1. 遺跡の位置と環境〔第1図〕

鹿野御茶苑遺跡は鳥取市西部の鹿野町に所在し、鹿野城が築かれている妙見山の南西裾部に位置している。北西側には河内川がほぼ南北に流れ、流域に形成された平野を望む丘陵上には、重山古墳群、西中園古墳群、今市古墳群など多くの古墳が築造されている。また、河内川に注ぐ水谷川下流の河岸段丘



第14図 鹿野御茶苑所在遺跡 調査トレーンチ配置図

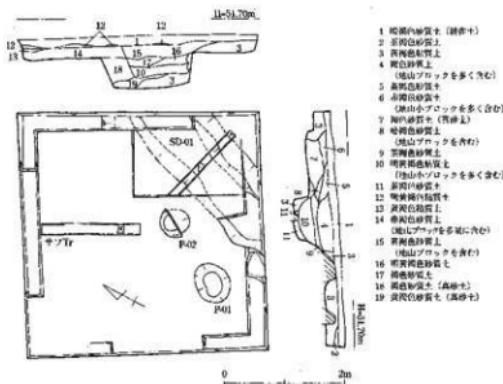
上には縄文時代早期から中期におよぶ複合遺跡で知られる柄杓目遺跡や、河内川左岸には奈良・平安時代の寺内廐寺遺跡などが展開している。さらに、鹿野町内には数多くの城跡や砦跡が確認されている。これらの城や砦は、河内川、水谷川、末用川の流域を望む丘陵や、平野部の低丘陵に点在しており、因幡国と伯耆国を結ぶ政治・経済・軍事上の要所として重要な地域であったことをうかがわせている。

2. 調査の概要〔第14図〕

今回の試掘調査は、電波塔の新設工事に伴って実施したもので、建設予定地内（約173m²）の1箇所にトレーンチを設定して行った。

第1トレーンチ（Tr-1）〔第15図、図版4〕

4×4mのトレーンチである。現状は畑地として耕作されているが、耕作前は宅地として利用されていた。地表面の標高は51.45mを測る。表土（耕作土）は厚さ8~15cmで、トレーンチ南側の表土下および北東壁下で基盤層と考えられる3、18、19層を検出した。基盤層は南から北へわずかに傾斜し、上面に客土（14層）が見られる。トレーンチ西側に設定したサブトレーンチ下層からはガラス片も出土しており、



第15図 鹿野御茶苑所在遺跡 第1トレンチ実測図

14層は近代の整地層と考えられる。

遺構は、溝状遺構（SD-01）、ピット状遺構（P-01、02）を検出した。SD-01はおおむね南北に延び、14層を切って掘り込まれている。規模は幅105cm前後、深さ50cmである。ピット状遺構はSD-01の西側に位置する。P-01が径54×68cm、深さ23cm、P-02は径50×50cm、深さ22cmを測り、14層を切って掘られている。

遺物は、表土中から陶磁器片、須恵器片、弥生土器片、SD-01埋土から陶磁器細片、14層から陶磁器片、ガラス片が出土した。

3. 小 結

調査の結果、溝状遺構1、ピット状遺構2を検出した。SD-01、P-02は、近代の客土と考えられる14層を切って掘られていることから近代遺構とみられ、同一面で検出したP-01も同時期と思われる。

今回行った調査区の周辺は、丘陵裾部に見られる微高地状の地形を呈している。遺跡の立地としては良好な条件を備えているといえ、今後、注意深く見守っていくべき地域である。（前田 均）

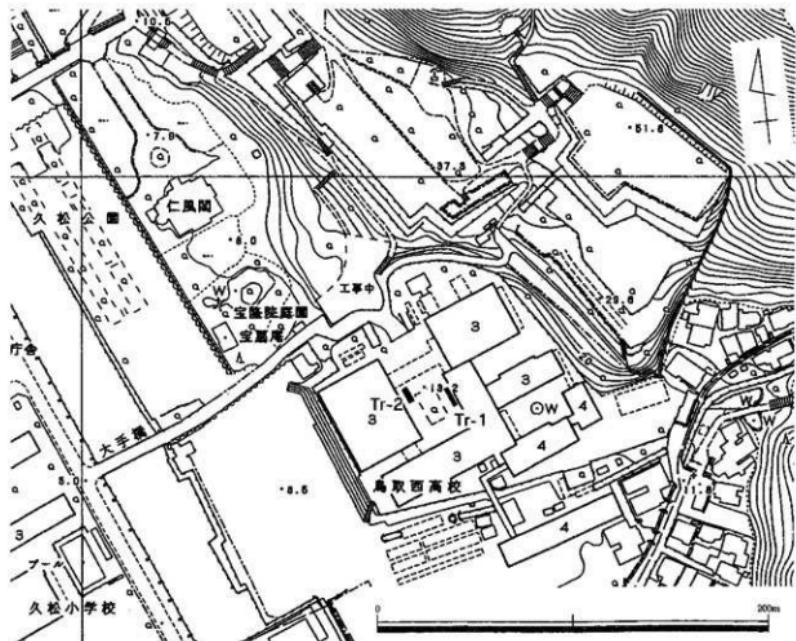
VII. 鳥取城三ノ丸跡

1. 遺跡の位置と環境（第1図）

鳥取城は、鳥取平野の東側に位置する久松山の山頂（標高263m）に天守閣を構える中世山城の様相を呈する城である。久松山の東側は秀吉の鳥取城攻めの際に本陣が置かれた本陣山に続くが、他の三方は山頂から急斜面で下る急峻な地形をもち、防御に適した立地条件を備えている。周辺には城や砦が築かれており、丸山、雁金山の砦や、秀吉の鳥取城攻めの拠点として陣を構えた太閤ヶ平、並食山砦が知られている。

久松山に城が築かれたのは16世紀中頃（天文年間）である。その後、天正4年（1576年）織田信長と毛利氏との対立から羽柴秀吉による中國攻略が始まり、鳥取城もその渦中におかれる。慶長5年（1600年）の關ヶ原の戦いで西軍に与した鳥取城主の宮部氏は滅亡し、宮部氏に代わって池田長吉が鳥取城に入った。長吉は城内、城下の大改修を行い、山上ノ丸の改築や山下ノ丸の二ノ丸、天球丸の構築、更には三ノ丸や堀の拡張整備などを行っている。ここに近世鳥取城のおおよその姿を作り上げた。

豊臣氏が大阪城で滅亡した後の元和3年（1617年）には、姫路城主池田光政が因幡・伯耆両国32万石の鳥取城主として転封されてきた。光政の入団によって、これまで小大名によって分割統治されていた



第16図 鳥取城三ノ丸跡 調査トレンチ配置図

因伯両国は一つに統治され、幕藩体制による鳥取藩が誕生した。寛永9年（1632年）岡山藩主池田光仲は当時幼少であったが、鳥取藩との交替転封の命を受けて光政と入れ替り、以後光仲の子孫が明治維新まで鳥取藩主としてその地位に付くこととなる。

明治維新によって廢藩置県が実施されると、鳥取城は池田家から陸軍省の所管となり、明治12年には鳥取城に残るすべての建物は解体撤去された。その結果、鳥取城には石垣、堀等の遺構のみが残ることとなった。

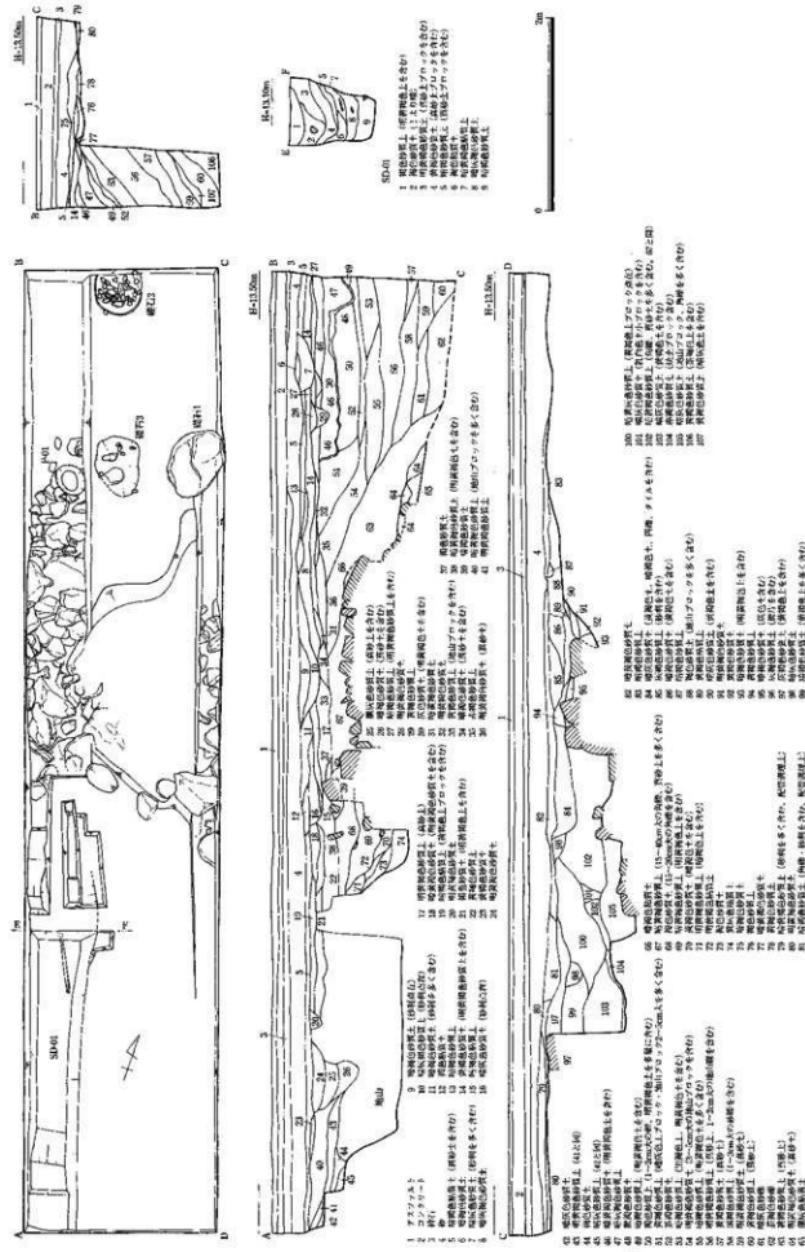
2. 調査の概要（第16図）

今回の試掘調査は、三ノ丸に位置する県立鳥取西高等学校の整備計画に伴い行ったものである。調査対象地の三ノ丸は、三代吉泰によって区画の拡張、殿舎の建築などの大改造が加えられ藩政の中心的な位置を占めている。調査場所の決定は、鳥取城三ノ丸絵図をもとに建物遺構が想定される場所を2箇所選定し行った。

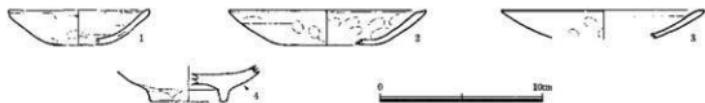
第1トレンチ（Tr-1）〔第17・18図、図版5・11〕

管理棟の南西側に設定した2×10mのトレンチである。太鼓御門の南東51mに位置し、現状は舗装された通路として整備されている。

地表面の標高は13.38mを測る。地表下25~40cm（1~4層）は通路に伴う整備層で、その下層には配水管などの施設整備に伴う堆積層（79、81、82、84、85層）や、瓦片、タイルなど近現代遺物を含む5層がみられる。5層の堆積はトレンチのほぼ全域で確認され、トレンチ北西側の5層下層では黄褐色砂質土（78層）や明黄褐色土（80層）の整地層が、南東側では地山が検出された。地山の検出面は



第17図 烏取城三ノ丸跡 第1トレンチ実測図



第18図 鳥取城三ノ丸跡 第1トレンチ出土遺物実測図

おおむね平坦で、その後北西側に下って行くが、トレンチ中央付近で斜面をわずかに掘削した痕跡が見られ、その前面で多量の石と土砂の堆積が確認された。土砂の堆積状況を見ると、多量の石を土砂（63、67、68、102、105層）で覆ったのち客土（47～80層）を行い造成した状況が観察される。北西側の地山面は客土下層の64層下の地表下1.6mで確認された。

造構は、礎石3（礎石1、2、3）、ピット（P-01）、溝状造構（SD-01）と、西壁断面から土坑状造構（SK-01）が検出された。

礎石1は80層を除去した段階で検出した。幅51cm、長さ73cmあまりの扁平な石材を水平に設置している。礎石2、3、P-01はトレンチ北側で確認された明黄褐色土・黄褐色土の整地面で検出された。礎石2、3は礎石の根石部と思われる。礎石2は径46cm、深さ10cm 前後の浅い掘り込みの中に2～5cm大の円礫や10cm前後の角礫を敷き、また、礎石3は幅42cm、長さ62cm、深さ6cmの掘り込みの中に角礫を置き根石としている。P-01は幅28cm、長さ34cm、深さ10cmである。

SD-01はトレンチ南隅で検出された。壁面はほぼ垂直に近く、底面は平坦に掘削され、南端には段が2段設けられている。溝の北端は確認されず、トレンチ西壁断面に地山の掘削面が観察されることからこの掘削によって切られたものと考えられる。溝の規模は幅71cm、検出長3.6m、深さ88cmである。

層序から見た検出遺構の変遷は、まずSD-01が先行し、礎石1、次に礎石2、3、P-01がつづくものと考えられる。

遺物は、SD-01埋土7、8層から木杭、最下層の9層から釉瓦瓦、ガラス片、ガラス瓶、銅線が出土した。また、包含層遺物として5層から土師皿片、陶磁器、タイル、67、99層から土師皿片、68層から土師皿、陶磁器が出土している。第18図1、2の土師皿は99層、3の土師皿、4の陶器碗は68層出土遺物である。

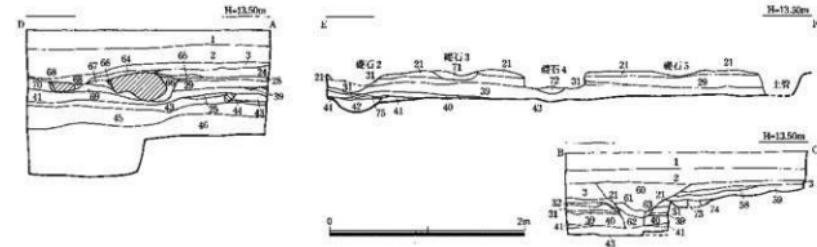
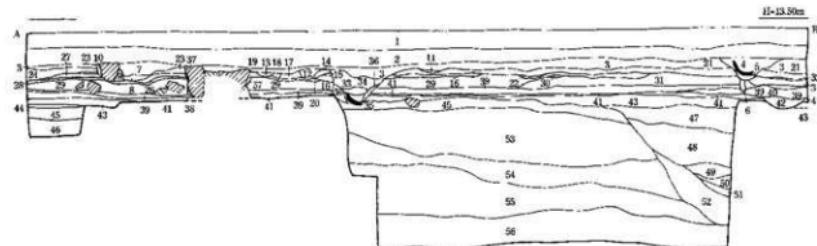
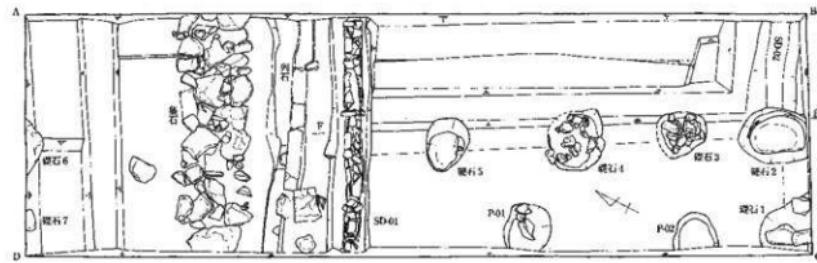
第2トレンチ（Tr-2）（第19・20図、図版5・6・7・11・12）

講堂の北東管理棟の北東に設定した2.5×8mのトレンチである。太鼓御門の南東40mに位置し、現状は舗装された通路として整備されている。

地表面の標高は13.4m前後を測る。地表下30～48cm（1、2層）は通路に伴う整備層である。整備層の下層にはトレンチ全域にわたって3層が見られ、ガラス片、ガラス瓶、プラスチック製品などの現代遺物が混入している。この3層を掘り込んでいる溝状造構（4、5層、60～63層）や、土坑状造構（7～10層）は明らかに現代造構である。3層の下層には硬く締まった21層が堆積している。21層の範囲は土管塙設溝の南側で、その上面から礎石やピットが検出された。21層の下位には29、31層、39層、43層が堆積しており、これらはトレンチのほぼ全域におよび、おおむね平坦に整えられている。特に43層は淡黄褐色砂質土（真砂土）敷き締め、水平に整地している状況がみられる。43層以下は上層と様相が異なり、大量の土砂（45、46、53～56層）を客土した様相を呈し、多数の瓦片や陶磁器片が含まれている。東壁真下について一部地表下2.2mまで掘削を行ったが地山は確認できなかった。

造構は、礎石7（礎石01～07）、列石1、集石1、溝2（SD-01、02）、ピット2（P-01、02）、南東壁断面から土坑状造構（SK-01）が検出された。

礎石01～05は21層の上面で検出され、21層を浅く掘り込み石材を納めている。03、04は礎石をぐくが掘り方内に根石が遺存している。礎石間は1.1m前後を測り、規則的な配置が見られることから礎石建物を構成するものと考えられる。礎石06、07は北西壁断面で検出した。



1. コンクリート
2. 黄褐色砂質土 (砾石混入)
3. 暗赤色砂質土 (2~3cm人の頭蓋骨A、ガラス片含む)
4. 暗褐色砂質土 (灰片を含む)
5. 暗褐色砂質土
6. 黄褐色砂質土
7. 暗褐色砂質土 (砂利石多く含む)
8. 山灰の砂質土 (砂利多く含む)
9. 泥炭化砂質土
10. 泥炭化砂質土
11. 泥炭化砂質土
12. 泥炭化砂質土 (灰片、黄褐色土層を多く含む)
13. 黄褐色砂質土 (黄褐色土層を含む)
14. 暗褐色砂質土
15. 灰白色質土 (灰片を多量に含む)
16. 黄褐色砂質土 (細砂土)
17. 黄褐色砂質土 (細砂土)
18. 黄褐色砂質土 (細砂土)
19. 黄褐色砂質土 (細砂土)
20. 黄褐色砂質土 (細砂土)
21. 黄褐色砂質土 (灰片を含む)
22. 黄褐色砂質土 (灰片を含む)
23. 灰白色質土 (灰片を含む)
24. 灰白色砂質土 (灰片、灰色L、砂利石7ブロックを含む)
25. 灰白色質土
26. 泥炭化砂質土
27. 泥炭化砂質土 (灰片)
28. 泥炭化砂質土 (砾石7)
29. 泥炭化砂質土 (砾石7)
30. 泥炭化砂質土
31. 泥炭化砂質土 (灰片を含む)
32. 黄褐色砂質土 (灰片を含む)
33. 黄褐色砂質土 (灰片を含む)
34. 黄褐色砂質土 (灰片を含む)
35. 黄褐色砂質土
36. 黄褐色砂質土 (灰片を含む)
37. 黄褐色砂質土 (灰片を含む)
38. 黄褐色砂質土 (灰片を含む)
39. 黄褐色砂質土 (灰片を含む)
20. 黄褐色砂質土 (灰片を含む。しまっている)
40. 黄褐色砂質土 (黄褐色土層ブロックを含む、やや粘性付)
41. 砂利石質土
42. 地質構造面質土 (SD-61)
43. 深黄褐色砂質土 (灰片上。しまっている)
44. 黄褐色砂質土 (灰片を含む)
45. 黄褐色砂質土 (灰片を含む)
46. 黄褐色砂質土 (灰片を含む)
47. 黄褐色砂質土 (灰片を含む)
48. 黄褐色砂質土 (灰片を含む)
49. 黄褐色砂質土 (灰片を含む)
50. 黄褐色砂質土 (灰片を含む)
51. 黄褐色砂質土 (灰片を含む)
52. 黄褐色砂質土 (灰片を含む)
53. 黄褐色砂質土 (灰片を含む)
54. 黄褐色砂質土 (灰片を含む)
55. 黄褐色砂質土 (灰片を含む)
56. 黄褐色砂質土 (灰片を含む)
20. 黄褐色砂質土 (黄褐色土層ブロックを含む)
32. 黄褐色砂質土 (黄褐色土層ブロックを含む)
33. 黄褐色砂質土
34. 黄褐色砂質土
35. 黄褐色砂質土 (黄褐色土層ブロックを含む、室内を多く含む)
36. 黄褐色砂質土 (黄褐色土層ブロックを含む)
37. 黄褐色砂質土 (黄褐色土層ブロックを含む)
38. 黄褐色砂質土 (黄褐色土層ブロックを含む)
39. 黄褐色砂質土 (黄褐色土層ブロックを含む)
40. 黄褐色砂質土
41. 黄褐色砂質土 (黄褐色土層ブロックを含む)
42. 黄褐色砂質土 (灰片を含む)
43. 黄褐色砂質土 (灰片を含む)
44. 黄褐色砂質土 (灰片を含む)
45. 黄褐色砂質土 (灰片を含む)
46. 黄褐色砂質土 (灰片を含む)
47. 黄褐色砂質土 (灰片を含む)
48. 黄褐色砂質土 (灰片を含む)
49. 黄褐色砂質土 (灰片を含む)
50. 黄褐色砂質土 (灰片を含む)
51. 黄褐色砂質土 (灰片を含む)
52. 黄褐色砂質土 (灰片を含む)
53. 黄褐色砂質土 (灰片を含む)
54. 黄褐色砂質土 (灰片を含む)
55. 黄褐色砂質土 (灰片を含む)
56. 黄褐色砂質土 (灰片を含む)
20. 黄褐色砂質土 (黄褐色土層ブロックを含む)
32. 黄褐色砂質土 (黄褐色土層ブロックを含む)
33. 黄褐色砂質土 (灰片を含む)
34. 黄褐色砂質土 (灰片を含む)
35. 黄褐色砂質土 (灰片を含む)
36. 黄褐色砂質土 (灰片を含む)
37. 黄褐色砂質土 (灰片を含む)
38. 黄褐色砂質土 (灰片を含む)
39. 黄褐色砂質土 (灰片を含む)
40. 黄褐色砂質土
41. 黄褐色砂質土 (灰片を含む)
42. 黄褐色砂質土 (灰片を含む)
43. 黄褐色砂質土 (灰片を含む)
44. 黄褐色砂質土 (灰片を含む)
45. 黄褐色砂質土 (灰片を含む)
46. 黄褐色砂質土 (灰片を含む)
47. 黄褐色砂質土 (灰片を含む)
48. 黄褐色砂質土 (灰片を含む)
49. 黄褐色砂質土 (灰片を含む)
50. 黄褐色砂質土 (灰片を含む)
51. 黄褐色砂質土 (灰片を含む)
52. 黄褐色砂質土 (灰片を含む)
53. 黄褐色砂質土 (灰片を含む)
54. 黄褐色砂質土 (灰片を含む)
55. 黄褐色砂質土 (灰片を含む)
56. 黄褐色砂質土 (灰片を含む)

第19図 鳥取城三ノ丸跡 第2トレント実測図

列石造構はSD-01の北西30cmに位置し、溝とほぼ平行に延びる。幅、厚さ15cm前後に加工された柱状の石材を浅い溝状の掘り方に配置し、上面の高さを一定に整えている。建物に伴う造構と考えられる。

集石造構は列石の北西側50cmに位置する。主軸は、隣接する列石造構やSD-01よりわずかながら北に振る。幅70~80cmを測り、規則的な幅で大小の石材を敷きつめている。石材の設置は、断面観察から溝状の掘り方に行われているものとみられる。上面の高さをほぼ一定に整えており、建物の基礎部と考えられる。

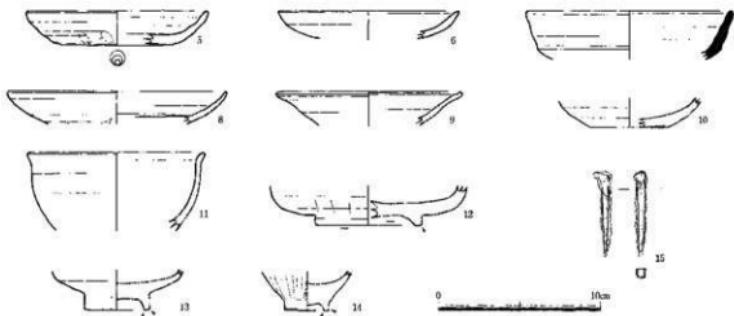
SD-01は列石造構南側にはほぼ隣接し、平行に延びる。幅40~45cm、深さ35cmあまりの溝内に、長さ90cm、口縁部径24cm、胴部径21cmを測る赤褐色の土管を配管している。溝の埋土には、ガラス片がかなり含まれており、近代の排水施設と考えられる。SD-02はトレンチの南東隅に位置し、整地層とみられる43層を掘り込んで作られている。幅48cm、深さ12cmあまりの浅い溝である。

SK-01は南東壁断面で確認した。整地層43層の下層から大きく掘り込まれた、深さ1.2m前後を測る土坑状の造構である。

P-01、02は径50cm前後、深さ11cm、5cmあまりである。P-01の掘り方内には角礫が見られることから、礎石の根石の可能性も考えられる。

層序から見た検出造構の変遷は、整地層43層下位で検出したSK-01が先行し、41層上面で確認されたSD-02、29層上面から掘り込まれた集石造構、28層上面から掘り込む礎石06、3層下層で検出された礎石01~05、07、列石、SD-01、P-01、02の順に移行するものと想定される。

遺物は、SD-01埋土から陶磁器、瓦、ガラスなどの破片が出土した。また、包含層遺物として、3層から陶磁器片、瓦片、ガラス片、プラスチック製品、10銭銅貨（昭和17年）、整地層43層下層からは土師皿、陶磁器、須恵器、土簡器などの破片と多数の瓦片、鉄釘が出土した。第20図の5~15は45、46、53~56層から出土した遺物で、土師皿（5、6）、須恵器（7）、陶磁器の皿（8、9、10）、碗（11、12、13）、杯（14）や鉄釘（15）がある。皿は灰釉を施した小皿で（10）は瀬戸美濃系と思われる。（11）は灰釉碗、（13）は白磁碗で、いずれも肥前系とみられる。（14）は伊万里の白磁小杯である。このほか45、46、53~56層からは唐津灰釉皿、瀬戸美濃灰釉碗、伊万里染付皿とみられる細片が出土している。いずれも17~18世紀代の陶磁器と思われる。



第20図 鳥取城三ノ丸跡 第2トレンチ出土遺物実測図

3. 小 結

今回の調査対象地となった三ノ丸は、関ヶ原合戦後に城主となった池田長吉時代の築造に始まり、三代吉泰による大改造や、廃藩置県に伴う鳥取城解体後の県立鳥取西高等学校の前身となる中学校の建築（明治22年）、昭和35年～38年の校舎全面改築など様々な経緯をたどってきた歴史である。

調査の結果、第1トレーニングから礎石3（礎石01、02、03）、ピット（P-01）、溝状遺構1（SD-01）、土坑状遺構（SK-01）、第2トレーニングで礎石7（礎石01～07）、列石遺構、集石遺構、溝2（SD-01、02）、ピット2（P-01、02）、土坑状遺構（SK-01）を検出した。第1トレーニングから検出した各遺構と、第2トレーニングの礎石（礎石01～07）、列石遺構、集石遺構、SD-01、ピット（P-01、02）は、層序や出土遺物から近代遺構とみられ、鳥取一中の建物に伴う可能性が考えられる。

また、第2トレーニング下層で検出した遺構についてみると、客土層（45、46、53～56層）に近代遺物が見られないことから、その上面を整えている43層が江戸期の整地層の可能性が考えられ、43層下位で検出したSK-01は江戸期に入る遺構として捉えることができる。さらに、43層の上層には平坦な地層（39、41層）が確認され、これらの層についても江戸期の整地層である可能性も残り、推定の城を出ないが41層上面で検出したSD-02も江戸時代に入る遺構の可能性も否定できない。

第1トレーニングでは江戸時代に比定できる遺構面は確認できなかったが、大きく削平された状況は見られず、江戸期の遺構が包蔵されていることは十分考えられる。

VII. 天神山遺跡

1. 遺跡の位置と環境〔第1図〕

天神山遺跡は鳥取市湖山町に所在し、JR鳥取駅から西北西へ4.5km、周囲約16kmの湖山池東岸に位置する。標高17m余りを測る独立丘陵「天神山」に築かれた布施天神山城を中心として標高2m前後の周囲、約400m四方に広がる戦国期の城館遺跡である。

遺跡の西に広がる湖山池は、鳥取平野を貫流する千代川の堆積作用と湖山砂丘の発達などによって形成された潟湖で、その周辺の低湿地や丘陵上には縄文時代前期末を始めとして弥生、古墳時代と数多くの遺跡、墳墓が分布している。桂見遺跡、布勢遺跡、西桂見遺跡、桂見墳墓群、岩吉遺跡などである。律令期に入りこの地域は因幡国高草郡に属し、当該期の代表的遺跡である岩吉遺跡では大量の墨書き器、木筒類、人形等が出土地している。14世紀、因幡守護に任じられた山名氏は、15世紀に入って守護所として布施天神山城を築き、16世紀後半に久松山へ移るまでのおよそ100年間、因幡国支配の拠点とした。

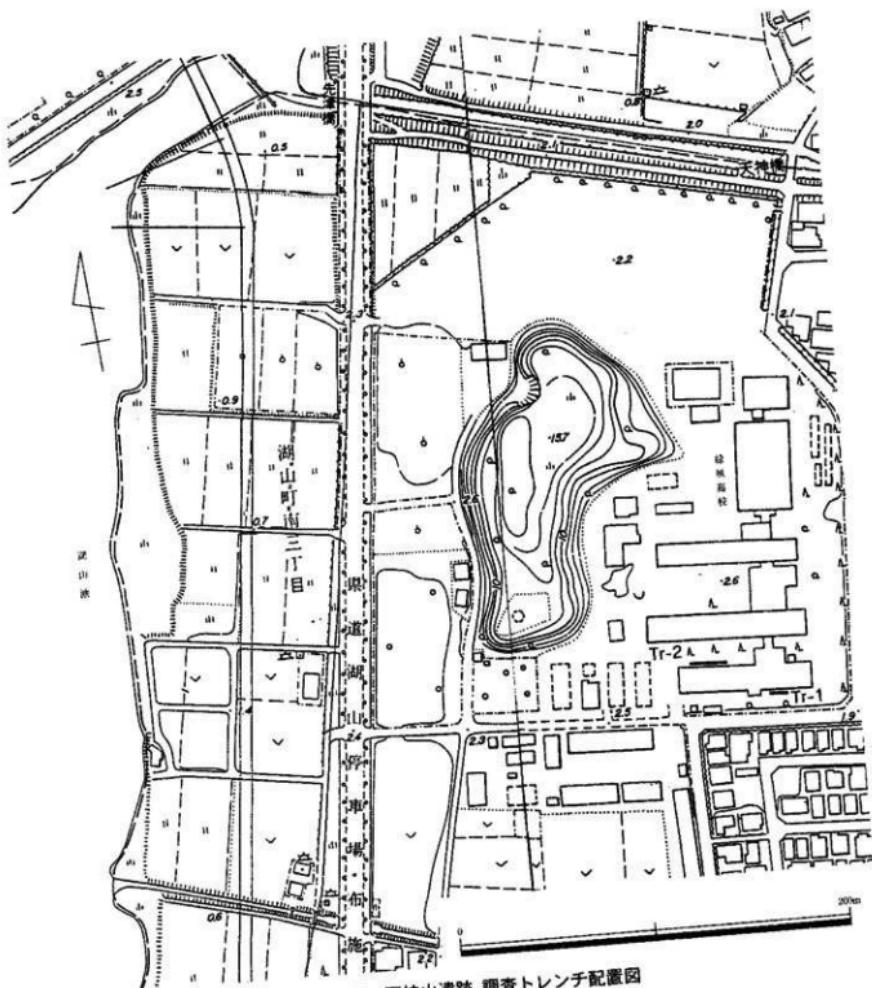
2. 発掘調査の概要〔第21図〕

今回の調査は、県立緑風高校内の配管敷設工事に伴うもので、古絵図に認められる天神山城の堀の確認に主眼をおいて実施した。対象地は標高2m弱の県立緑風高校（旧鳥取農業高等学校）実習棟周囲で、堀と直交方向に第1トレーニング、第2トレーニングを設定した。

調査の結果、第2トレーニングで、堀の最深部とみられる落ち込みと炭化層に伴う複数の土師器皿等を検出した。また、遺物は両トレーニング合わせてコンテナ（容量54×34×20cm）約3箱分で、土師器、須恵器、陶磁器、土鍬、漆器、鉄製品、弥生土器などがある。多くは客土（小礫を含む黒褐色粘質シルト）からの出土である。

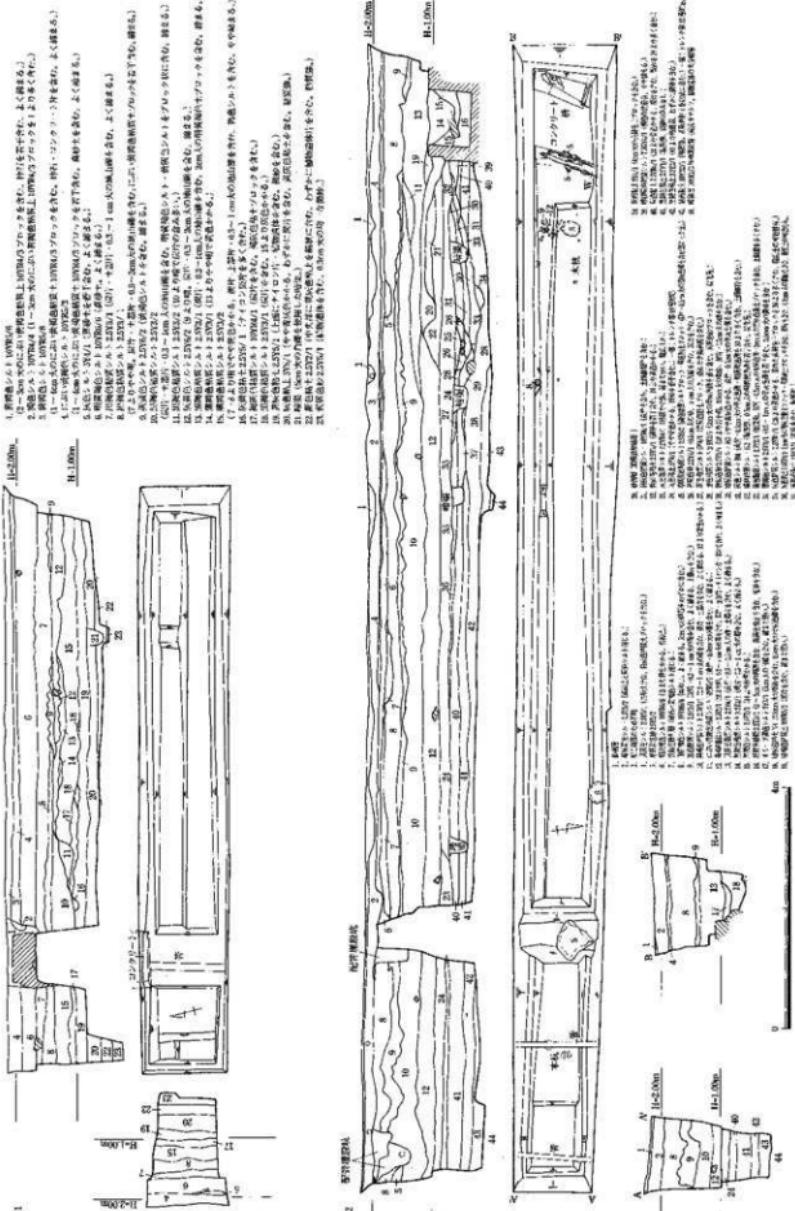
第1トレーニング（Tr-1）〔第22・23図、図版7・12〕

実習棟南の東寄りに設定した幅1.5m×長さ9.7mのトレーニングである。現地表面は標高2.2mを測る。標高1.7mまで（第1～6層）が砂利や真砂土で堅く締まる。以下、厚さ0.7m程（第7～18層）は小礫を含む黒褐色粘質シルトを主体とするが、土師器、須恵器、陶磁器片、ガラス・ビニール片等を含む客土である。標高1.0m前後で旧水田（第19層黄灰色粘土）が確認され、その下層（第20層）に暗渠が掘り込まれる。以下、標高0.7mで第22層粘質の強い黒色粘土、標高0.44mで第23層植物遺体を含む黄灰色砂層を確認した。

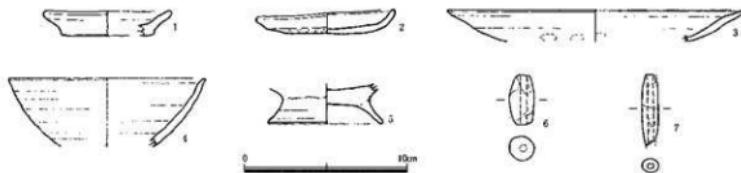


第21図 天神山遺跡 調査トレンチ配置図

遺物のはほとんどは第7～17層中の出土で、土師器片が大多数を占め、次いで須恵器、僅かに陶磁器、土錐、弥生土器（後期後半期）が含まれる。土師器は甕・鍋片も微量認められるが、多くは無高台の土師器皿杯片で、外腹底部は糸切りもみられるものの指おさえやナデ調整のものが主体となる。圓化した（1）～（3）は第7～12層、（4）（6）（7）は第15層、（5）は第7層の出土である。甕（1）は底部糸切りと推測され、口縁端部に煤が付着する。甕（2）は口径8.25cm、（3）は口径17.9cmを測り、精緻な胎土で黄橙色の色調、底部外面指おさえ、ナデ調整である。椀（4）は内外面赤彩が認められる。底部（5）は高台がハ字状に開く。



第22図 天神山遺跡 第1・2トレンチ実測図



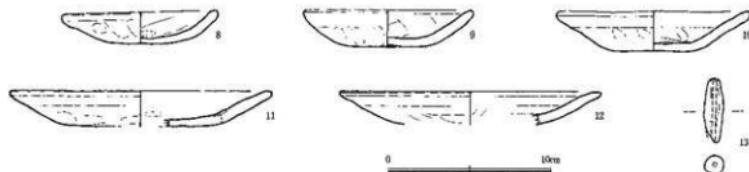
第23図 天神山遺跡 第1トレンチ出土遺物実測図

第2トレンチ (Tr-2) (第22・24図、図版7・8・12)

実習棟北の西寄りに設定した幅1.3~1.6m×長さ19mのトレンチである。現地面は標高2.18mを測る。上層から砂利、真砂土、黒褐色粘質シルトの客土(第1~13層)、旧水田と暗渠(第24~40層)、粘質の強い黒色粘土(第43層)など土層断面の状況は第1トレンチとほぼ同様であり、各層全体的に第1トレンチより若干低めの標高となり、北側へ向けて傾斜が認められる。また、標高0.20mで第44層暗褐色植物泥炭層(所謂ガマソ層)を確認した。

トレンチ東側の第43層上で直径10cm弱を測る立杭2本を検出した。また、トレンチ西端で、幅内法0.9mのコンクリート枠と木材と角礫を用いた暗渠施設、その東側に砂利を上面に敷き詰めた農道(第20~22層)、さらに東側に旧水田(第24層)を検出した。農道下付近の第24層下、標高0.7m前後で炭化層を含む落ち込みを確認した。一部暗渠の掘削によって擾乱(第25~29層)されているものの、黒色炭化層(第32層)の下層(第33層)で土師器皿類が集中して出土している。断面や遺物の出土状況から、堀の最深部分と考えられる。堀は上部のかなりの部分を水田造営の際削平されており、遺存深0.48m、最深部標高は0.15mを測る。なお、堀の埋土を第36層までとみた場合、断面での遺存幅8.8mである。

遺物の多くは客土である第10・12層中の出土で、次いで第33層を中心とした堀埋土、堀部分を暗渠で掘削した際の擾乱土中の遺物が中心であり、コンテナ(容量54×34×20cm)約2箱分である。客土中には第1トレンチと異なり陶器類が多く、近現代の鎌や金具など鉄製品も含まれる。次いで土師器、須恵器である。堀埋土の遺物の大部分は無高台の土師器皿で、僅かに須恵器や陶器、漆器片が含まれる。土師器甕・鍋片は認められない。土師器皿はすべて底部外面指おさえやナデ調整で、糸切り、高台はみられない。図化した(8)は暗渠擾乱土中、(9)(10)(11)は第33層、(10)はトレンチ東側の暗渠埋設土、(11)は客土である第12層の出土である。(8)~(12)は土師器皿で、精緻な胎土でおおむね黄橙色~褐色の色調を呈し底部外面は指おさえ、ナデ調整である。口径9cm弱、11cm弱、16cm弱とタイプ分けが可能で、平成16年度調査の第1トレンチ堀下層で出土した土師器皿とほぼ同様な法量・形状である。(13)は(9)(10)の下位周辺で出土しており、長さ3.9cmを測る中央が膨らんだ管状土錐である。



第24図 天神山遺跡 第2トレンチ出土遺物実測図

3. 小 結

以上のことから、第1トレンチと第2トレンチはほぼ同様の断面状況で、第2トレンチが全体的に標高がやや低い地形とみられる。標高0.9~1mを測る旧水田面に、土師器皿など遺物の含みから遺跡内の包含層を削平して用いたと考えられる黒褐色粘質シルトを厚さ70cm程度出土し、さらに真砂土を入れて叩き締め整地している。元々軟弱地盤であり、第1トレンチでは標高0.44mで植物遺体を含む砂層、第2トレンチでは標高0.2m程度で泥炭層が広がる。旧水田面は、作り付けのコンクリート枠や砂利を敷いた農道などから計画的に造成されたと見られ、コンクリート枠の位置から堀周辺の地盤を利用して用水路を設けたと考えられる。そして造成する際、堀の上部も大きく削平を受けたと思われる。ただ、古絵図との照合から想定どおり堀の位置の確認と遺物とともに最下層を検出することができ、トレンチ箇所では遺存状態は必ずしも良好ではないものの、他では堀が良好な状態で埋蔵されている可能性もある。今後周辺の開発には十分に注意を払っていく必要があろう。

VIII. 青谷大坪所在遺跡

(青谷大坪イカウ松遺跡・青谷大坪大縄手遺跡)

1. 遺跡の位置と環境〔第1図〕

大坪所在遺跡はJR青谷駅の南東約2.7km、青谷町の東側を流れる日置川流域にある大坪集落の東側の水田地帯に位置する。周辺の遺跡としては、西側丘陵上に弥生時代後期から古墳時代の集落遺跡である大口第1遺跡、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての埴丘墓、住居址が確認された大口第2遺跡が存在する。さらに上方の稜線上には大坪占墳群が存在する。また、丘陵船部には弥生時代後期から奈良時代にかけての住居や古墳が確認されたカヤマ遺跡が存在する。東側の丘陵には蔵内古墳群などが確認されている。

2. 調査の概要〔第25図〕

今回の調査はほ場整備事業に伴い、昨年度からの継続調査である。昨年度の調査結果と現況の標高などから旧地形を想定すると、複数の旧河道が存在すると考えられ、周辺の微高地に遺跡が存在する様相を呈している。旧河道および遺跡の範囲をより具体的に把握することに主眼をおいて、各トレンチを設定した。調査は表土である耕作土とそれ以外の土を分別して、調査後には表面に耕作土を埋め戻した。

青谷大坪イカウ松遺跡

第15トレンチ(Tr-15)〔第26図、図版8〕

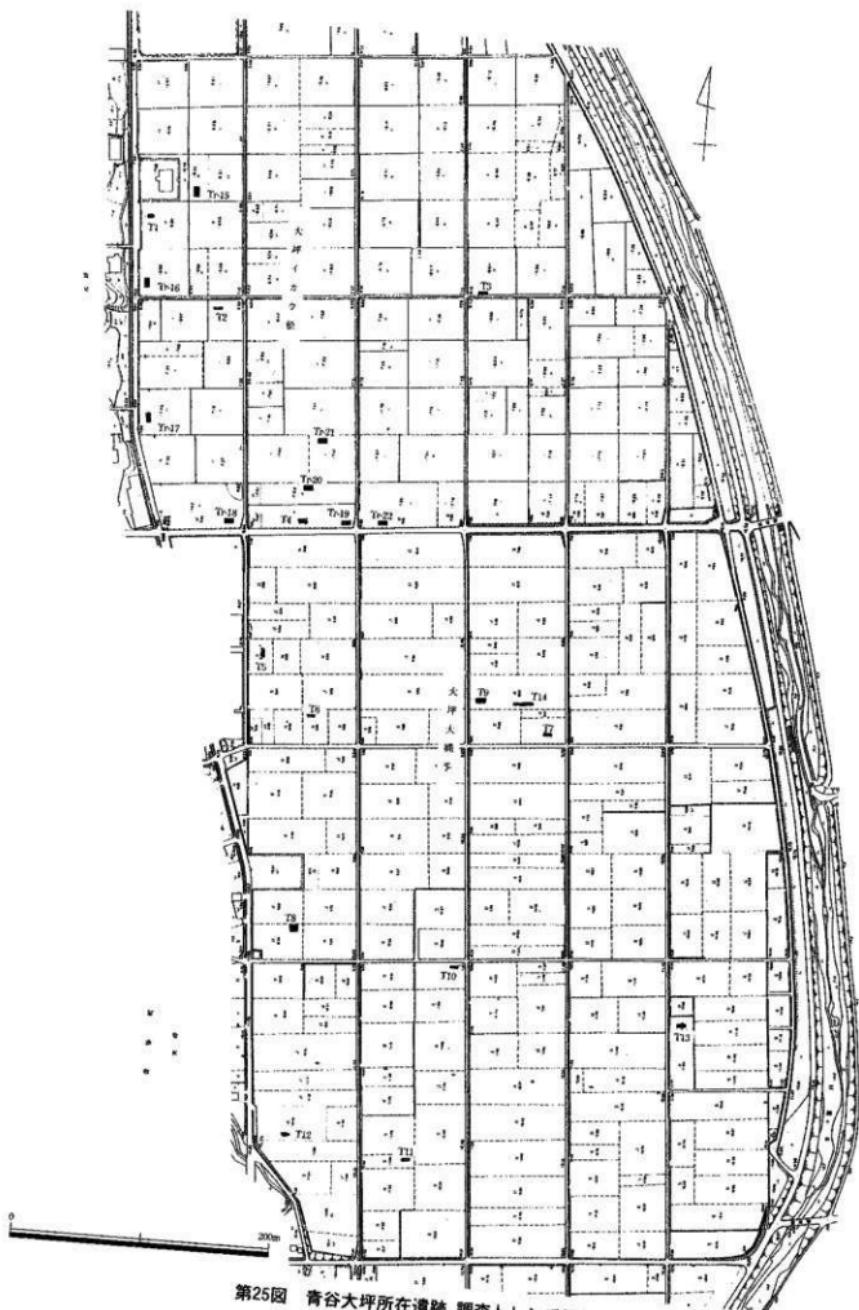
昨年度の調査で遺構が確認されたトレンチ(T1)の北東側に設定した3.5×7.5mのトレンチである。標高6.3mの現地表から約20cm程度は耕作土、床土である。以下、標高6.1mで3.褐灰色極細砂7.5YR 4/3、5.9mでトレンチの東側は4.灰褐色細砂7.5YR4/2、西側は径5cm程度の礫層となる。層序的には礫層の上面に細砂層が堆積する様相を成し、細砂層は北東方向に落ち込む。旧河道に関わる堆積と考えられ遺構の存在は確認されなかった。

第16トレンチ(Tr-16)〔第26・29図、図版8・12〕

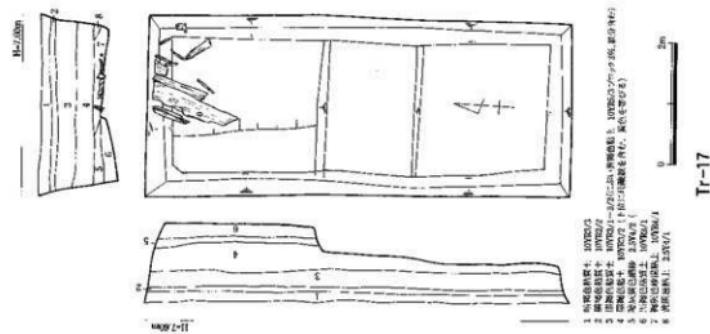
昨年度の調査で遺構が確認された第1トレンチ(T1)の南側に設定した3×7mのトレンチである。基本的な層序は標高6.6mで3. 黒褐色粘土(質)±10YR3/2~3/1、6.3mで4. 黑褐色粘土(質)±10YR3/1~3/2、6.0mで5. 黑褐色粘土10YR4/1、5.8mで6. 灰色粗砂5Y4/1である。標高6.3mの第4層以下の層位から自然木、板状・棒状の部材などが散在的に出土している。木製品の出土状況や砂層が確認されていることなどから、Tr-15同様旧河道に関連する堆積と考えられる。(1)は須恵器杯蓋、「かえり」を有する。木製品(2・3)はそれぞれ馬形、盞串の可能性もある。

第17トレンチ(Tr-17)〔第26図、図版9〕

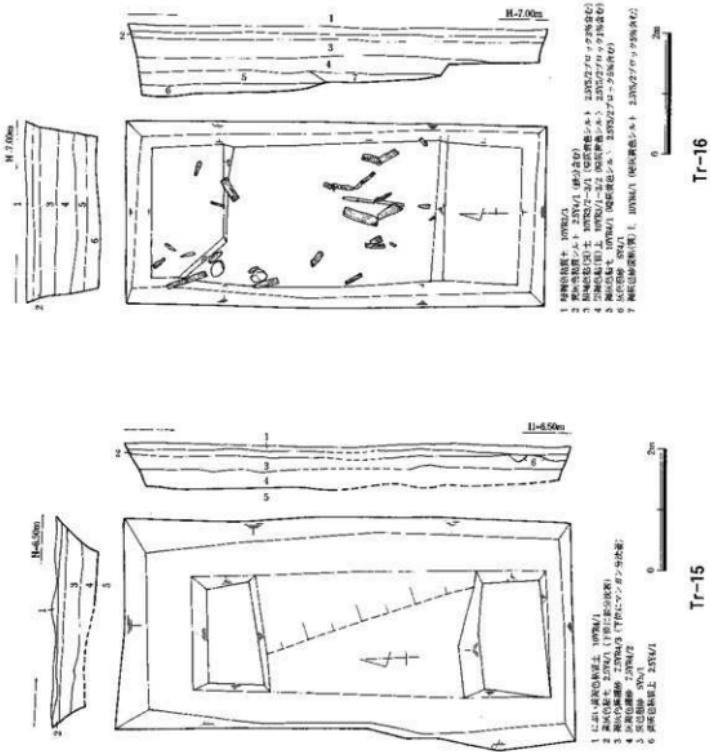
T-16の南側約100mに設定した3×7mのトレンチである。基本層序は標高7.0mで3. 黑褐色粘質土10YR3/1~3/2、6.7mで4. 黑褐色粘土10YR3/2、6.3mで5. 暗灰黄色細砂2.5Y4/2、6.2mで6. 黑褐

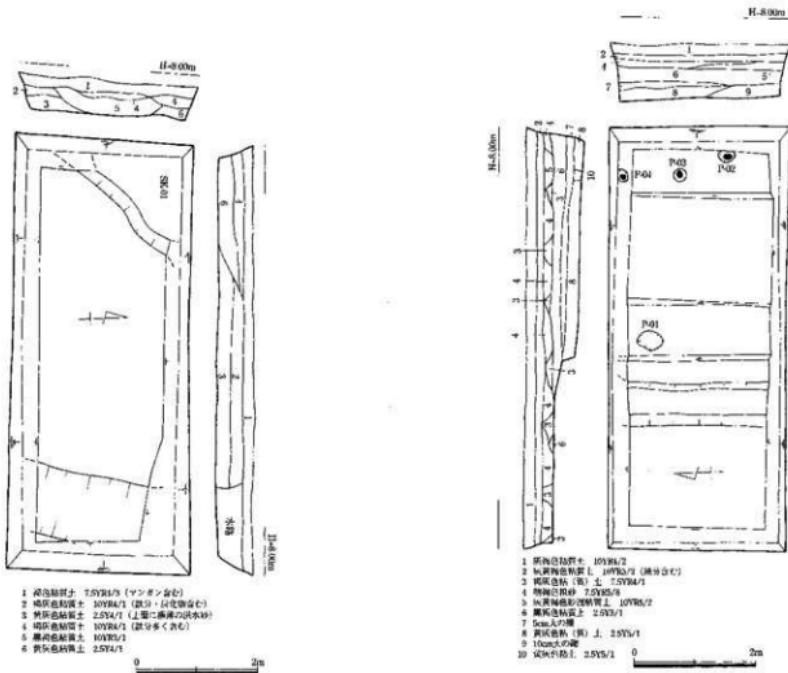


第25図 青谷大坪所在遺跡 調査トレンチ配置図



第26図 青谷大坪所在遺跡第15・16・17トレンチ実測図





第27図 青谷大坪所在遺跡第19・21トレンチ実測図

色粘質土10YR3/1となる。標高6.4m付近から北北東方向に傾斜する堆積状況を成し、第7・8層から自然木、板状部材などの木製品が出土している。Tr-15・16と同様、山河道の肩部などに関わる堆積と考えられる。

青谷大坪大塚手遺跡

第18トレンチ (Tr-18) [第28・29図、図版9・12]

昨年度の調査で遺構が確認された第4トレンチ (T4) の西側約60mに設定した3×7mのトレンチである。基本層序は標高7.3mで4.褐灰色粘質土10YR4/1、7.1mで5.褐灰色粘質土10YR4/1に径5cm程度の礫を20%含む、6.9m以下は径15cm程度の礫層となる。標高7.3mの第4層上面には3.黄褐色粗砂10YR5/6が部分的に覆い、洪水砂と考えられる。標高7.1mの第5層が遺構面に対応すると考えられるが、遺構は確認できなかった。包含層は第4層を主とし、土師器、須恵器、陶磁器のほか弥生土器(4)も出土している。

第19トレンチ (Tr-19) [第27・29図、図版9・12]

昨年度の調査で遺構が確認された第4トレンチ (T4) の東側約30mに設定した3×7mのトレンチである。基本層序は標高7.65mで2.褐灰色粘質土10YR4/1、7.4mで3.黄灰色粘質土2.5Y4/1となる。耕作土下の標高7.6mから近世以降の水路、土坑状遺構(SK-01)を検出した。第2・3層が遺構面と考えられる。主な包含層は第2層で土師器、陶磁器(5・6)などが少量出土している。(5)は焼付。

(6)は青磁碗、内面見込みに陰刻を有する。.

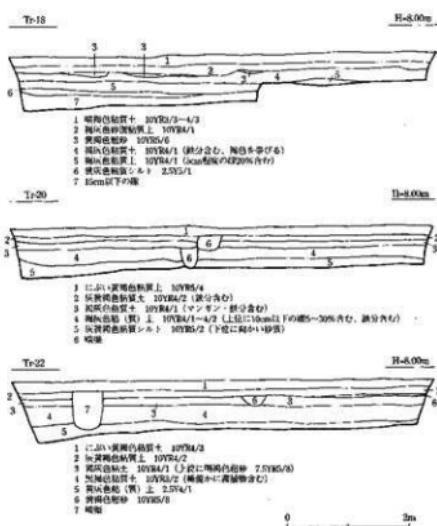
第20トレンチ (Tr-20) [第28・29図、図版9・10・13]

昨年度の調査で遺構が確認された第4トレンチ (T4) の北側約35mに設定した3×7mのトレンチである。基本層序は標高7.3mで3.褐灰色粘質土10YR4/1、7.2mで4.褐灰色粘(質)土10YRA/1~4/2(上位に10cm以下の砾を含む)、7.0mで5.灰黃褐色粘質シルト10YR5/2となり、下方に向い砂へと変わる。標高7.0mの第5層が遺構面に対応すると考えられるが遺構は確認できなかった。上な包含層は第4層で上師器、瓦質土器(7)などが出土している。

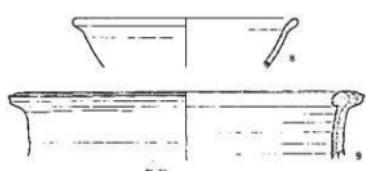
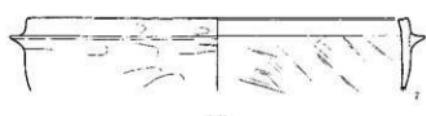
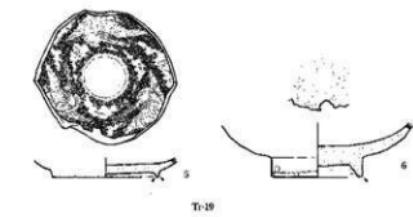
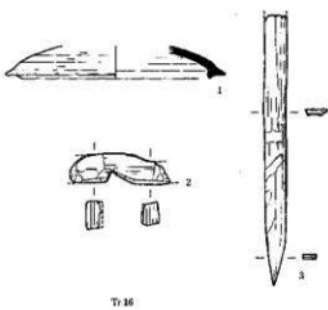
(7)は羽釜の口縁部。

第21トレンチ (Tr-21) [第27・29図、図版10・13]

昨年度の調査で遺構が確認された第4トレンチ (T4) の北東側約65mに設定し



第28図 青谷大坪所在遺跡 第18・20・22トレンチ断面図



第29図 青谷大坪所在遺跡 第16・18・19・20・21トレンチ出土遺物実測図

た 3×7 mのトレンチである。基本層序は標高7.25mで3.褐灰色粘(質)土7.5YR4/1、7.1mで6.黒褐色粘質土2.5Y3/1、6.9mで7.径5cmの大礫層、6.8mで8.黄灰色粘(質)土2.5Y5/1となる。第3層上面には南北方向に幾条もの溝状に洪水砂と考えられる4.明褐色粗砂7.5YR5/8が堆積していた。遺構は第8層から掘り込まれるピット(柱穴)を4基検出した。うち3基には、径10cm前後の柱根が遺存していた。詳細な時期は不明であるが上層に包含する遺物などから中世期頃と考えられる。ピット(柱穴)は完掘をせず、検出した状態で埋め戻した。

第22トレンチ(Tr-22)〔第28図、図版10〕

Tr-19の東側約20mに設定した 3×7 mのトレンチである。基本層序は標高7.5mで3.褐灰色粘土10YR4/1、7.4mで4.黒褐色粘土10YR3/2、7.1mで5.黄灰色粘(質)土2.5Y4/1となる。第5層が遺構面に対応すると考えられるが遺構は確認できなかった。包含層は第4層を主とし、陶磁器(8・9)、土師器などが少量出土している。(8)は灰色釉、(9)は越前焼の壺口縁部。

3. 小結

調査前の予察どおり、平野部の西側を流れていると考えられる旧河道の両側の微高地に遺跡が点在する様相を呈している。旧河道の左岸に位置する大坪イカウ松遺跡は、出土した土器類から弥生時代から中世の範疇の遺跡と考えられる。昨年度の調査(T4)で弥生期の溝状遺構が確認されているが、今回の調査(Tr-15~17)では顕著な遺構は確認できなかった。自然木や木製品が普遍的に包含する層位が存在することや、砂礫層が存在することなどから、今回の調査地は旧河道の川岸付近に位置していると考えられ、川岸付近の湿地などに木製品が堆積したものと理解できよう。木製品のなかには部材のほか、祭祀具(形代)の可能性を有するものもあり付近に祭祀遺構が存在する可能性も考えられる。旧河道の右岸に相当する大坪大縄手遺跡(Tr-18~22)では、出土した七器類から中世を主とした遺跡と考えられる。Tr-21でピット(柱穴)を4基検出した以外には顕著な遺構は検出されなかった。微高地に存在する遺構は狭小な範囲で粗密があるものと考えられる。

調査対象地の水田地帯は広大であり、旧河道を境に複数の遺跡が存在する。具体的な遺跡の様相を把握する為には詳細分布調査を含め、緻密な試掘トレンチの設定および古環境復元が必要である。

IX. 高住銅鐸出土推定地

1. 遺跡の位置と環境〔第1図〕

高住銅鐸出土推定地は湖山池中央の南岸、JR鳥取駅より西へ約6kmの高住集落の南側約300mの丘陵斜面地に所在する。湖山池に向かって伸びる丘陵は東側へ派生する尾根が數本あり、その南側斜面地に位置する。高住から出土した銅鐸は残存高約40.5cmの流水文銅鐸である。銅鐸は昭和初期に出土したため、詳細な出土地が判明しておらず、現在では3箇所の出土推定地が所在しており、今回はその内の1箇所に事業者が計画されている。

周辺の遺跡は良田所在遺跡で述べたとおりである。

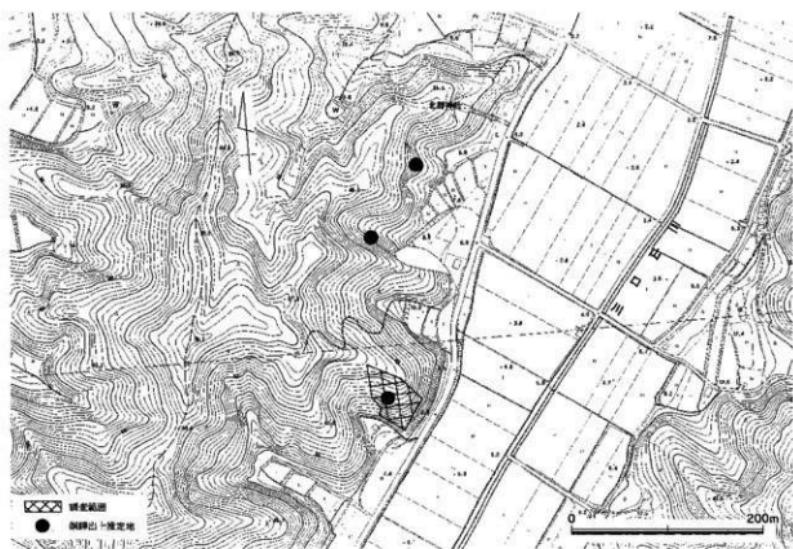
2. 調査の概要〔第30図、図版10〕

今回の調査は民間の真砂土採取事業計画に伴って実施したものである。対象地は丘陵南側斜面から銅鐸が出土していることから、両側斜面地から谷部にかけて電磁法探査を行い、金属反応の有無を確認した。電磁法探査は非破壊探査手法であり、電磁誘導現象を利用し、大地の電気伝導度を測定するものである。探査面積は2,537m²である。

調査の方法は調査地内に1mごとに測線を設定し、測線に沿って、1mごとの測点において測定を実施した。金属物の反応があった箇所については、表面を払うのみに止めた。調査の結果、開発区域内に金属物の反応は6箇所確認されたが、いずれも、表土中から鉄などの金属片が出土しただけであった。

3. 小 結

今回の電磁法探査では銅鐸を検出することはできなかったが、明確な出土地が判明していないため、今後も周辺部の尾根を開発する場合は十分注意する必要があるだろう。



第30図 高住銅鐸出土推定地調査位置図

第3章 付 章

I. 鳥取市青谷大坪岸ノ上遺跡出土木材の年輪年代測定

独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所
埋蔵文化財センター 古環境研究室長 光谷拓実

1.はじめに

このたび、鳥取市教育委員会より青谷町大坪岸ノ上遺跡の試掘調査において、溝状遺構から年輪年代測定が可能と思われる木材（建築部材？）が発見され、その一部が当研究室に送られてきた。以下に年輪年代法による調査結果の概略を報告する。

2.方 法

この発掘現場は青谷上寺地遺跡に近い場所でもあり、この遺跡と同年代の可能性も示唆されたことから、早速、年輪読取器を使って年輪幅を計測し、青谷上寺地遺跡出土の木材（スギ）で作成した619年分のスギの暦年標準パターン（495B.C.～124A.D.）と照合することとした。

コンピュータによる年輪パターンの照合法は、相関分析手法¹⁾によった。このとき、測定対象材の年輪パターンと暦年標準パターンとの照合においては、相関係数rを求めた後、t検定による検定をおこない、照合が成立したと認めてよいt値の基準値（ $t \geq 5.0$ 前後）が検出された年代位置でもって、相方の年輪バターングラフを重ね合わせ、目視で詳細にチェックし、最終的に年輪年代を確定することとした。年輪を割り出す際に基準となるスギの暦年標準パターンは、青谷上寺地遺跡出土木材で作成した619年分（Aパターン）と、検証するために滋賀県下の出土木材（おもに弥生時代のスギ材）を使って作成した750年分（651B.C.～199A.D.）の暦年標準パターン（Bパターン）も使用することとした。

3.結 果

送られてきた木材の断片は、その大きさが幅約21.0cm、長さ約28.0cm、もっとも厚いところで約10.0cmのものであった。その一部には、心材に続く辺材部が約1.5cm残存していた。このような形状をした木材であれば、比較的伐採年に近い年代を示すことになる。計測した年輪数は131層であった。この木材の年輪パターンとAパターン、およびBパターンとの照合において、その最外年輪の年代はいずれのパターンとも西暦87年の年代で合致することが判明した。したがって、この木材の伐採年は87年 + α 年（これは加工時に削除されて失われた辺材部分）となる。この α 年を正確に求めることは不可能であるが、どうみても西暦100年を少し下った年代、つまり100年代の前半が原本の伐採年代と推定される。この結果は、この発掘地区においても青谷上寺地遺跡と同年代の弥生時代後期の遺跡が存在していることの証左に他ならない。実際に貴重な物的証拠が発見されたものである。

表1 青谷大坪岸ノ上遺跡出土木材の年代測定結果

試 料	樹 種	年 輪 数	年 輪 年 代	t 値
建築部材の断片	スギ	131	87	6.3 (Aパターン) 8.1 (Bパターン)

（補遺）

この年代測定は平成16年度に測定していただいたもので、遺跡の名称は調査時に使用したものである。このため遺跡名は青谷大坪岸ノ上遺跡となっており、本報告書に記載された遺跡の名称とは一致していない。出土した場所は第1トレンチであり、遺跡の名称は青谷大坪イカウ松遺跡である。

1) 田中琢、光谷拓実、佐藤忠信『年輪に歴史を読む—日本における古年輪学の成立—』、奈良国立文化財研究所学報第48、同朋舎出版、1990

II. 鳥取市青谷大坪岸ノ上遺跡の自然科学分析

株式会社 古環境研究所

I. 青谷大坪岸ノ上遺跡における植物珪酸体（プラント・オパール）分析

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 (SiO_4) が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山, 2000）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山, 1984）。

そこで、大坪岸ノ上遺跡においても農耕と植生を検討するために植物珪酸体分析を行うことになった。

2. 試 料

調査地点は、第1トレンチと第9トレンチの2地点である。分析試料は、第1トレンチでは上位より砂混じりの暗灰褐色シルト（7層）、砂混じり黒（灰）褐色シルト（12層）、砂混じり黒（灰）褐色シルト（8層）、砂混じり黒（灰）褐色シルト（9層）の4点、第9レンチでは上位より灰褐色シルト（6層）、シルト混じり灰褐色微砂（7層）、シルト混じり暗褐色微砂（8層）、シルト混じり（暗）黒灰色微砂（14層）、シルト混じり（暗）黒灰色微砂（17層）の5点の計9点である。

3. 分析方法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原, 1976）をもとに、次の手順で行った。

- (1) 試料を105°Cで24時間乾燥（絶乾）
- (2) 試料約1gに直径約40 μm のガラスピーブを約0.02g添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）
- (3) 電気炉灰化法（550°C・6時間）による脱有機物処理
- (4) 超音波水中照射（300W・42kHz・10分間）による分散
- (5) 沈底法による20 μm 以下の微粒子除去
- (6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- (7) 検鏡・計数

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞（葉身にのみ形成される）に由来する植物珪酸体を同定の対象とし、400倍の偏光顯微鏡下で行った。計数は、ガラスピーブ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。

検鏡結果は、計数値を試料1g中の植物珪酸体個数（試料1gあたりのガラスピーブ個数に、計数された植物珪酸体とガラスピーブの個数の比率を乗じて求める）に換算して示した。また、おもな分類群については、この値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位：10~5g）を乗じて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。各植物の換算計数はそれぞれイネ（赤米）は2.94（種実重は1.03）、ヨシ属（ヨシ）は6.31、スキ属（スキ）は1.24、メダケ節型は1.16、ネザサ節は0.48、クマザサ属型（チシマザサ節・チマキザサ節）は0.75、ミヤコザサ節型は0.30である。

4. 結 果

分析試料から検出された植物珪酸体は、イネ、ヨシ属、スキ属型、タケ亜科（メダケ節型、ネザサ節型、クマザサ属型、ミヤコザサ節型、その他）および未分類である。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1と図1~4に示す。主要な分類群については顕微鏡写真を示す。以下に、植物珪酸体の検出状況を記す。

(1) 第1トレンチ

イネは7層、12層、8層、9層のすべてからいずれも高い密度で検出されている。ヨシ属は7層で、スキ属型は7層と9層で検出されているが、いずれも低い密度である。タケ亜科ではクマザサ属型が

すべての試料で高い密度で検出されている。このうち12層と9層では非常に高い密度である。ネザサ節型、クマザサ属型はすべての試料で、メダケ節型は9層でそれぞれ検出されているが、これらはいずれも低い密度である。

(2) 第9トレンチ

イネは8層、14層、17層で検出されている。17層では高い密度である。また、14層でも比較的高い密度である。ヨシ属は8層と14層で、ススキ属型は14層と17層で検出されているがいずれも低い密度である。タケモ科ではクマザサ属型がすべての試料で検出されている。6層では非常に高い密度である。ネザサ節型は6層、14層、17層で、ミヤコザサ節型は6層と14層でそれぞれ検出されているが、いずれも低い密度である。

5. 青谷大坪岸ノ上遺跡における稻作

第1トレンチでは、7層、12層、8層、9層の各層でイネの植物珪酸体が検出されている。各層における植物珪酸体密度は3,500～5,000個/gであり、稻作跡の可能性を判断する際の基準値とされる3,000個/gを超過している。このことから、これら4層についてはいずれも水田耕作層であった可能性は高いと判断される。

第9トレンチでは、8層、14層および17層でイネの植物珪酸体が検出されている。17層では植物珪酸体密度が5,300個/gと高い値であり、明瞭なピークが認められることから、当該層については水田耕作層であった可能性が高いと考えられる。14層では植物珪酸体密度が2,300個/gと比較的高い値であり、直上の8層に比べ高い密度であることから、上層からの混入である危険性は考えにくい。こうしたことから、当該層では調査地点あるいはごく近傍で稻作が行われていた可能性が考えられる。8層では植物珪酸体密度は1,000個/gとやや低い値である。今回、直上に堆積する9層が分析の対象となっていないことから、上層との対比が行えない。よって、当該層における稻作の可能性についての判断は保留する。

イネ以外の分類群では、クマザサ属型が第1トレンチの12層と9層、第9トレンチの6層で非常に高い密度であり、第1トレンチの7層と8層でも高い密度である。したがってこれらの層の堆積時は、調査地近傍はクマザサ属（ササ属）などの繁茂する乾いた環境であったと推定される。第9トレンチの14層ではヨシ属が若干認められることから、調査地周辺に湿地かそれに近い環境が存在したとみられる。

6. まとめ

大坪岸ノ上遺跡において植物珪酸体分析を行い、稻作の可能性ならびに植生について検討した。その結果、第1トレンチの7層、12層、8層、9層、第9トレンチの17層の各層が水田耕作層であった可能性が高いと判断された。また、第9トレンチの14層では調査地あるいは近傍で稻作が営まれていた可能性が認められた。なお、第1トレンチの各層と第9トレンチの6層の堆積時は、調査地近傍はクマザサ属（ササ属）等の繁茂する乾いた環境であり、第9トレンチの14層堆積時は、湿地かそれに近い環境であったと推定された。

II. 青谷大坪岸ノ上遺跡における珪藻分析

1. はじめに

珪藻は、珪酸質の被殻を有する单細胞植物であり、海水域や淡水域などの水域をはじめ、湿った土壤、岩石、コケの表面にまで生息している。珪藻の各分類群は、塩分濃度、酸性度、流水性などの環境要因に応じて、それぞれ特定の生息場所を持っている。珪藻化石群集の組成は、当時の堆積環境を反映していることから、水域を主とする古環境復原の指標として利用されている。

ここでは、大坪岸ノ上遺跡において採取された堆積物について珪藻分析を行い、遺跡周辺の水域を中心とした堆積環境を検討する。

2. 試 料

試料は、第1トレンチの上位より砂混じりの暗灰褐色シルト（7層）、砂混じり黒（灰）褐色シルト

(12層)、砂混じり黒(灰)褐色シルト(8層)、砂混じり黒(灰)褐色シルト(9層)の4点、第9レンチの上位より灰褐色シルト(6層)、シルト混じり灰褐色微砂(7層)、シルト混じり暗褐色微砂(8層)、シルト混じり(暗)黒灰色微砂(14層)、シルト混じり(暗)黒灰色微砂(17層)の5点の計9点である。いずれも植物珪酸体分析に供された試料と同一試料である。

3. 方 法

以下の手順で珪藻を抽出し、プレラートを作成した。

(1) 試料から乾燥重量1gを秤量(2) 10%過酸化水素水を加え、加温しながら1晩放置(3) 上澄みを捨て、細粒のコロイドと薬品を水洗(4) 残渣をマイクロビペットでカバーグラスに滴下して乾燥(5) マウントメディアによって封入し、プレラート作成(6) 検鏡・計数

検鏡は、生物顯微鏡によって600~1000倍で行った。計数は珪藻被殻が100個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレラート全面について精査を行った。

4. 結 果

試料から出現した珪藻は、中-真塩性種(汽-海水生種)1分類群、貧-中塩性種(淡-汽水生種)5分類群、貧塩性種(淡水生種)26分類群である。計数された珪藻の学名と個数を表2に示す。また珪藻総数を基数とする百分率を算定したダイアグラムを図5に示す。

以下にダイアグラムで表記した主要な分類群を記す。

〔貧-中塩性種〕

Achnanthes brevipes, *Navicula peregrine*, *Rhopalodia gibberula*

〔貧塩性種〕

Amphora copulata, *Amphora montana*, *Coccineis placentula*, *Cymbella naviculiformis*, *Cymbella silesiaca*, *Cymbella subaequalis*, *Cymbella tumida*, *Eunotia minor*, *Gomphonema parvulum*, *Gyrosigma spp.*, *Hantzschia amphioxys*, *Navicula confervacea*, *Navicula cuspidata*, *Navicula mutica*, *Pinnularia borealis*, *Pinnularia microstauron*, *Pinnularia schroederii*, *Pinnularia viridis*, *Rhoicosphenia abbreviata*, *Synedra ulna*

〔中-真塩性種〕

Grammatophora macilenta

(1) 第1トレンチ(7層、12層、8層、9層)

7層、12層では珪藻密度が非常に低く、珪藻はほとんど検出されなかった。8層ではほとんど貧塩性種(淡水生種)で占められ、流水性種の*Gomphonema parvulum*、止水性種の*Cymbella tumida*, *Synedra ulna*、流水不定性種の*Amphora copulata*, *Gyrosigma spp.*などが優占する。わずかに貧-中塩性種(淡-汽水生種)の*Navicula peregrine*が出現する。9層では珪藻密度が非常に低く、貧塩性種(淡水生種)で好流水性珪藻がわずかに検出された。

(2) 第9トレンチ(6層、7層、8層、14層、17層)

いずれの試料も珪藻密度が非常に低く、珪藻はほとんど検出されなかった。14層では、少ないながらも貧塩性種(淡水生種)の陸生珪藻が優占し、中でも*Hantzschia amphioxys*が卓越し、*Navicula mutica*, *Amphora montana*, *Pinnularia borealis*などが伴われる。流水性種で、中へ下流水性河川環境指標種群の*Rhoicosphenia abbreviata*や沼沢湿地付着性環境指標種群の*Coccineis placentula*、止水性種の*Pinnularia microstauron*なども低率に出現する。

5. 硅藻分析から推定される堆積環境

(1) 第1トレンチ

下部より、9層、12層、7層では珪藻密度が非常に低く、8層では流水性種、止水性種、流水不定性種などが優占する。こうしたことから、8層は流水域、止水域の混在する沼沢地の環境が推定される。なお、貧-中塩性種(淡-汽水生種)が検出されるが、これは飛来したものとみられる。8層の上部の

7層と12層および下部の9層については、植物珪酸体分析結果で示されたようにいずれも水田耕作層と考えられることから、土壤・水分中の珪酸分をイネに吸収され、珪藻は生育できない状況であったと推定される。

(2) 第9トレンチ

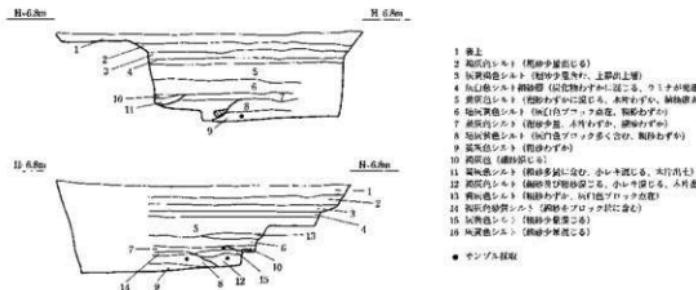
いずれの試料も珪藻密度が非常に低い。そのうち、14層では陸生珪藻がやや多く認められることから、湿った環境が示唆される。17層は第1トレンチ同様、水田耕作層と考えられることから珪藻の生育は困難な環境と判断される。6層、7層、8層は珪藻の生育できない乾燥した環境あるいは土層の堆積速度が非常に速かったことなどが想定される。

5. まとめ

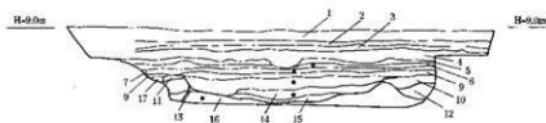
第1トレンチでは、8層の珪藻群集から流水域、止水域の混在する沼沢地の環境が推定された。その上層・下層の7層、12層、9層および第9トレンチの17層は、植物珪酸体分析からいずれも水田耕作層と考えられたことから、珪藻の生育には適さない環境であったと判断された。第9トレンチの14層では陸牛珪藻がやや多く、湿った環境が示唆された。同トレンチ6層、7層、8層は、珪藻の生育できない乾燥した環境であったか、堆積速度の速い堆積であった可能性が推定された。

(補遺)

自然科学分析は平成16年度に実施したものである。遺跡の名称は調査時に使用したものである。このため遺跡名は青谷大坪岸ノ上遺跡となっており、本報告書に記載された遺跡の名称とは一致していない。第1トレンチは青谷大坪イカウ松遺跡、第9トレンチは青谷大坪大縄手遺跡に名称を変更する。



第1トレンチ北側上層及び南側土層図



第9トレンチ南側土層図

- | | |
|--------------------------|--------------------------|
| 1 地上 | 12 河底内シルト (河底少量泥じる、木根出土) |
| 2 河底内シルト (河底少量泥じる) | 13 河底内シルト (河底少量泥じる、木根出土) |
| 3 河底内シルト (河底少量泥じる、木根出土) | 14 河底内シルト (河底少量泥じる、木根出土) |
| 4 河底内シルト (河底少量泥じる、木根出土) | 15 河底内シルト (河底少量泥じる、木根出土) |
| 5 河底内シルト (河底少量泥じる、木根出土) | 16 河底内シルト (河底少量泥じる、木根出土) |
| 6 河底内シルト (木根) | 17 河底内シルト (河底少量泥じる、木根出土) |
| 7 河底内シルト (土壌) | 18 河底内シルト (河底少量泥じる、木根出土) |
| 8 河底内シルト (河底少量泥じる、木根出土) | 19 河底内シルト (河底少量泥じる、木根出土) |
| 9 伏流水跡シルト (伏流水跡含む、土壌) | 20 河底内シルト (河底少量泥じる、木根出土) |
| 10 河底内シルト (河底少量泥じる、木根出土) | 21 河底内シルト (木根出土) |

第31図 サンプル採取位置図

検出密度 (単位 : ×100個/g)

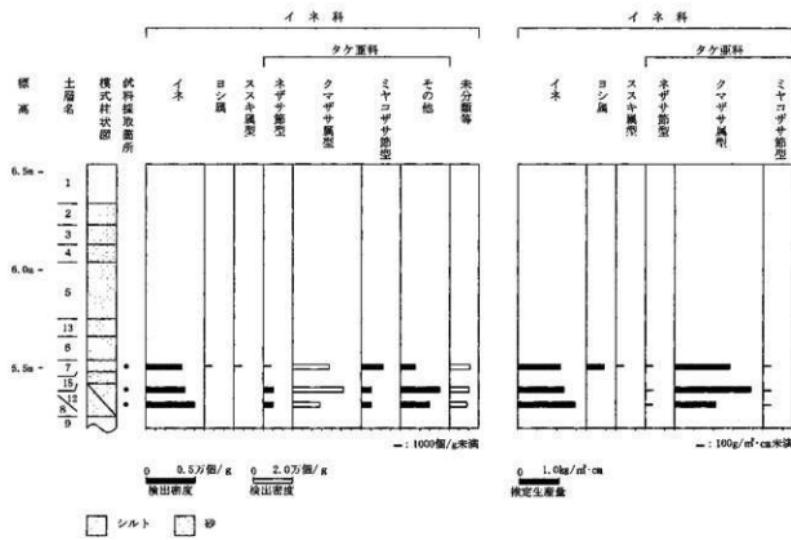
分類群(和名・学名)＼層位			第1トレンド			第9トレンド			
	7	12	8	9	6	7	8	14	17
イネ科	Gramineae (Grasses)								
	<i>Oryza sativa (domestic rice)</i>	37	40	50	35	10	23	53	
	<i>Phragmites (reed)</i>	7				5	15		
	<i>Miscanthus type</i>	7			9		8	13	
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)								
	メダケ節型	<i>Pleioblastus sect. Medake</i>			9				
	ネザサ節型	<i>Pleioblastus sect. Nezasa type</i>	7	10	10	9	12	15	7
	クマザサ属型	<i>Sasa (except Miyakozasa) type</i>	187	259	140	263	26	47	85
ミヤコザサ節型	<i>Sasa sect. Miyakozasa</i>	22	10	10	18	12		15	20
	ミヤコザサ節型	<i>Sasa sect. Miyakozasa</i>	15	40	30	35	12	17	7
	その他	<i>Others</i>							
	未分類等	<i>Unknown</i>	105	100	90	88	85	69	31
植物生體体総数			387	459	330	466	401	112	87
植物生體体総数									

おもな分類群の堆生産量 (単位 : kg/m²·cm)

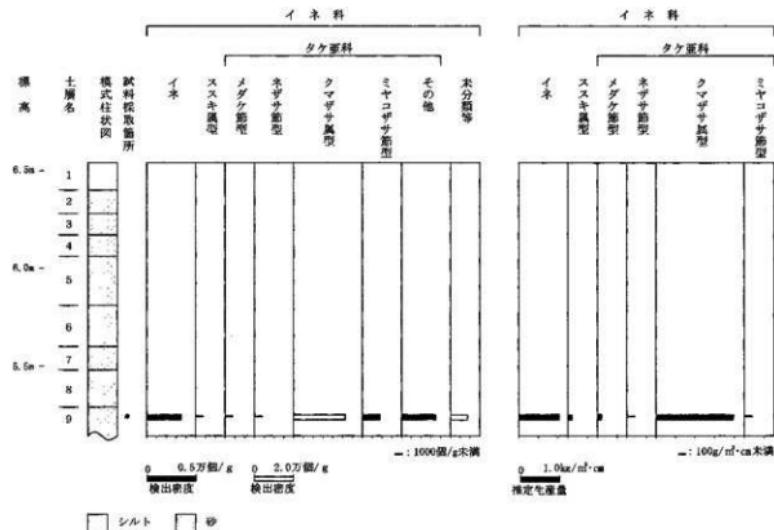
イネ	<i>Oryza sativa (domestic rice)</i>	1.10	1.17	1.47	1.03			0.30	0.68	1.57
ヨシ属	<i>Phragmites (reed)</i>	0.47						0.32	0.97	
ススキ属型	<i>Miscanthus type</i>	0.09				0.11			0.10	0.17
メダケ節型	<i>Pleioblastus sect. Medake</i>					0.10				
ネザサ節型	<i>Pleioblastus sect. Nezasa type</i>	0.04	0.05	0.05	0.04	0.06			0.07	0.03
クマザサ属型	<i>Sasa (except Miyakozasa) type</i>	1.40	1.95	1.05	1.97	2.10	0.19	0.31	0.63	0.15
ミヤコザサ属型	<i>Sasa sect. Miyakozasa</i>	0.07	0.03	0.03	0.05	0.04			0.05	

※試料の仮比重量を1.0と仮定して算出。

表2 青谷大坪岸ノ上遺跡の植物珪穀体分析結果

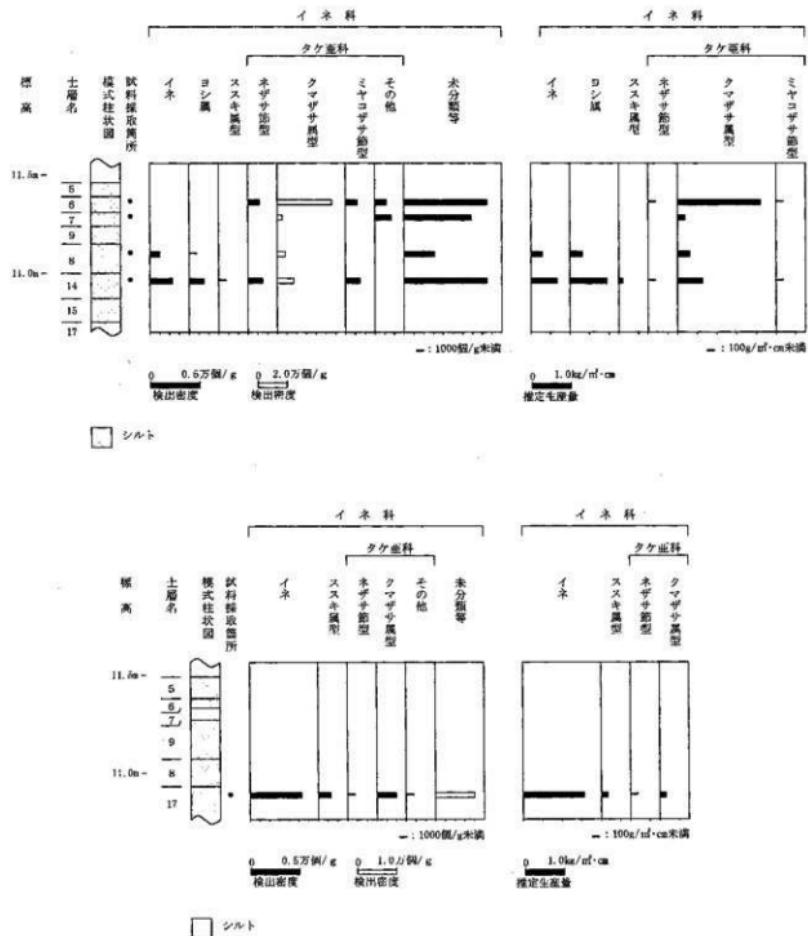


第1トレンチ北壁における植物珪酸体分析結果



第1トレンチ東壁における植物珪酸体分析結果

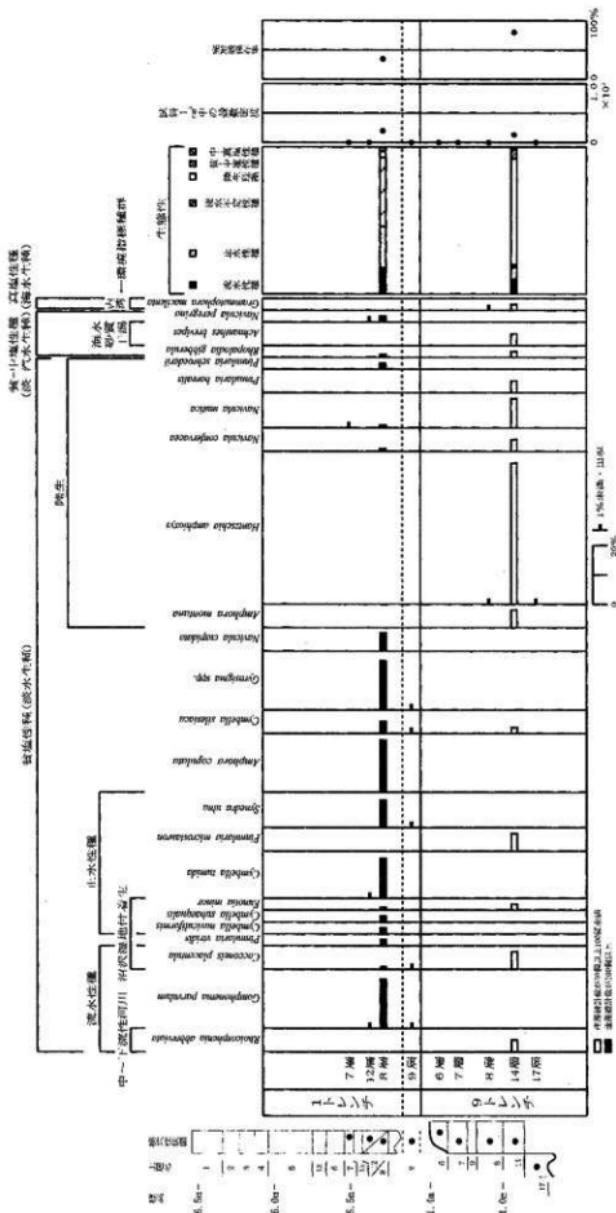
第32図 第1トレンチにおける植物珪酸体分析結果



第33図 第9トレンチにおける植物珪酸体分析結果

分類群	第1トレンチ				第9トレンチ				
	7	12	8	9	6	7	8	14	17
貧塩性種(淡水生種)									
<i>Amphora copulata</i>			17						
<i>Amphora montana</i>								3	
<i>Caloneis lauta</i>			1						
<i>Cocconeis placentula</i>			1	4				3	
<i>Cymbella naviculiformis</i>			2						
<i>Cymbella silesiaca</i>			4	2				1	
<i>Cymbella subaequalis</i>			2						
<i>Cymbella tumida</i>	1		13						
<i>Eunotia minor</i>			1					1	
<i>Fragilaria construens</i>			1						
<i>Gomphonema angustatum</i>			1						
<i>Gomphonema parvulum</i>	1		16	2					
<i>Gomphonema sp.</i>				1					
<i>Gyrosigma spp.</i>			16	1					
<i>Hantzschia amphioxys</i>							1	24	2
<i>Meridion circulare v. constrictum</i>			1						
<i>Navicula conservacea</i>			1					2	
<i>Navicula cuspidata</i>			6						
<i>Navicula mutica</i>	1		1					5	
<i>Pinnularia borealis</i>								2	
<i>Pinnularia microstauron</i>								3	
<i>Pinnularia schroederii</i>			2						
<i>Pinnularia viridis</i>			2						
<i>Rhoicosphenia abbreviata</i>								2	
<i>Stauroeis phoenicenteron</i>			1						
<i>Synechra ulna</i>			9	1					
貧-中塩性種(淡-汽水生種)									
<i>Achnanthes brevipes</i>								2	
<i>Rhopalodia gibberula</i>			1					1	
<i>Navicula crucicula</i>			1						
<i>Navicula peregrina</i>	1		2						
<i>Nitzschia levigata v. victoriae</i>								1	
中-真塩性種(汽-海水生種)									
<i>Grammatophora macilenta</i>							1	1	
合計	1	3	102	11	0	0	2	51	2
未同定	0	0	0	0	0	0	0	3	0
破片	17	8	178	26	1	0	3	15	3
試料 1 cm 中の殻数密度	2.0	· 4.0	2.0	3.6	0.0	0.0	4.0	1.3	4.0
	$\times 10^2$	$\times 10^2$	$\times 10^1$	$\times 10^1$			$\times 10^2$	$\times 10^4$	$\times 10^2$
完形殻保存率 (%)	-	-	36.4	-	-	-	-	78.3	-

表3 青谷大坪岸ノ上遺跡における珪藻分析結果



第34図 背谷大坪岸ノ上遺跡における主要珪藻ダイアグラム

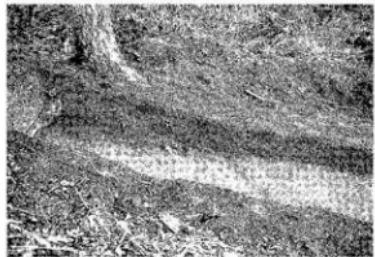
写 真 図 版



開地谷古墳群 調査地遠景（南東から）



開地谷古墳群 第2トレンチ完掘状況
(北東から)



開地谷古墳群 第2トレンチ上方断面
(北西から)



開地谷古墳群 第2トレンチ下方断面
(北から)



開地谷古墳群 第1トレンチ完掘状況
(北東から)



開地谷古墳群 第1トレンチ下方断面
(北から)



開地谷古墳群 第3トレンチ調査前
(南東から)



開地谷古墳群 第3トレンチ断面
(南から)

図版 2



野坂遺跡 調査地遠景（南西から）



野坂遺跡 調査前（西から）



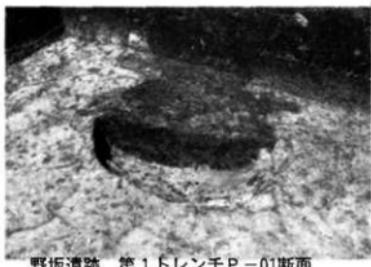
野坂遺跡 第1トレンチ北壁断面（南から）



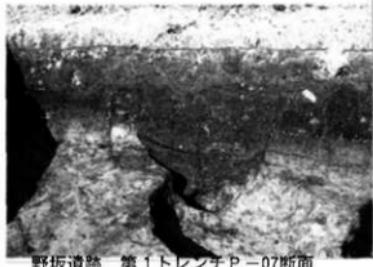
野坂遺跡 第1トレンチ東壁断面（西から）



野坂遺跡 第1トレンチ遺構完掘状況
(北から)



野坂遺跡 第1トレンチP-01断面
(南西から)



野坂遺跡 第1トレンチP-07断面
(西から)



野坂遺跡 第1トレンチP-04断面
(北から)



良田所在遺跡 調査地遠景（南東から）



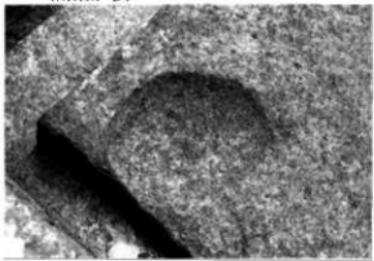
良田所在遺跡 調査前（北西から）



良田所在遺跡 第1トレンチ完掘状況
(南東から)



良田所在遺跡 第1トレンチ
溝状遺構SD-01検出状況（東から）



良田所在遺跡 第1トレンチP-01
検出状況（東から）



良田所在遺跡 調査後（南東から）



青谷上寺地遺跡 調査地遠景（南から）

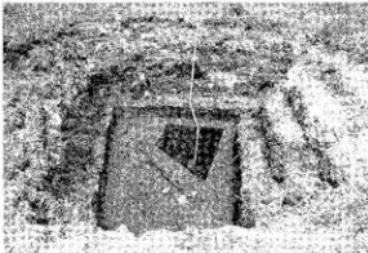


青谷上寺地遺跡 表土除去作業（北から）

図版 4



青谷上寺地遺跡 上層 溝状造構
検出状況（西から）



青谷上寺地遺跡 完掘状況（南から）



青谷上寺地遺跡 第1トレンチ東壁断面
(西から)



青谷上寺地遺跡 第1トレンチ
下層遺物出土状況（西から）



鹿野御茶苑所在遺跡 調査地遠景
(西から)



鹿野御茶苑所在遺跡 調査前(南から)



鹿野御茶苑所在遺跡 第1トレンチ
完掘状況（南西から）



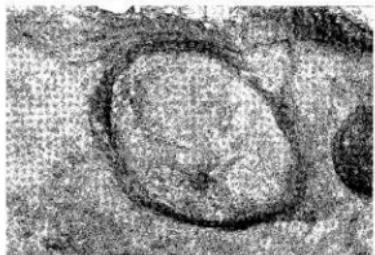
鹿野御茶苑所在遺跡 第1トレンチ
南東壁断面（北西から）



鳥取城三ノ丸跡 調査地遠景(北東から)



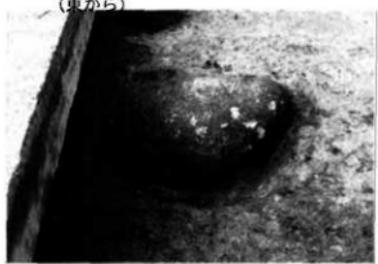
鳥取城三ノ丸跡 第1トレンチ
SD-01 (北西から)



鳥取城三ノ丸跡 第1トレンチ磁石 1
(東から)



鳥取城三ノ丸跡 第1トレンチ
SD-01横断面 (南から)



鳥取城三ノ丸跡 第2トレンチ磁石 2
(北東から)



鳥取城三ノ丸跡 第2トレンチ
集石、列石、SD-01 (北西から)

図版 6



鳥取城三ノ丸跡 第1トレンチ完掘（1次）
(北西から)



鳥取城三ノ丸跡 第1トレンチ完掘（最終）
(南東から)



鳥取城三ノ丸跡 第2トレンチ完掘（1次）
(南東から)



鳥取城三ノ丸跡 第2トレンチ完掘（最終）
(北西から)



鳥取城三ノ丸跡 第2トレンチ完掘
東壁下サブトレンチ断面（南から）



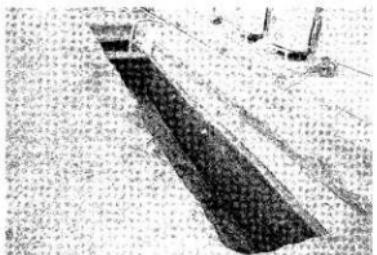
鳥取城三ノ丸跡 第2トレンチ
北壁断面（南から）



天神山遺跡 調査地遠景（南東から）



天神山遺跡 第1トレンチ完掘状況
(北西から)



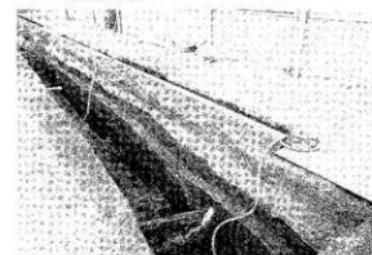
天神山遺跡 第1トレンチ北壁断面
(南東から)



天神山遺跡 第1トレンチ深掘部断面
(南から)



天神山遺跡 第2トレンチ完掘状況
(北西から)

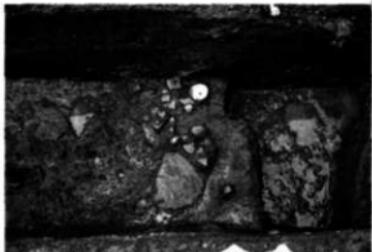


天神山遺跡 第2トレンチ南壁断面
(北西から)

図版 8



天神山遺跡 第2トレンチ コンクリート筋
検出状況（北西から）



天神山遺跡 第2トレンチ土築血検出状況
(北東から)



青谷大坪所在遺跡 調査地遠景（南から）



青谷大坪所在遺跡 Tr-15
完掘状況（南から）



青谷大坪所在遺跡 Tr-15
西壁断面（南東から）



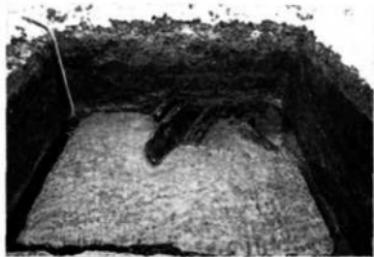
青谷大坪所在遺跡 Tr-16
完掘状況（北から）



青谷大坪所在遺跡 Tr-16
東壁断面（北西から）



青谷大坪所在遺跡 Tr-16
木製品出土状況（西から）



青谷大坪所在遺跡 Tr-17
北壁断面（南から）



青谷大坪所在遺跡 Tr-17
木製品出土状況（北から）



青谷大坪所在遺跡 Tr-18
東壁断面（西から）



青谷大坪所在遺跡 Tr-18
南壁断面（北東から）



青谷大坪所在遺跡 Tr-19
完掘状況（東から）



青谷大坪所在遺跡 Tr-19
北壁断面（南から）

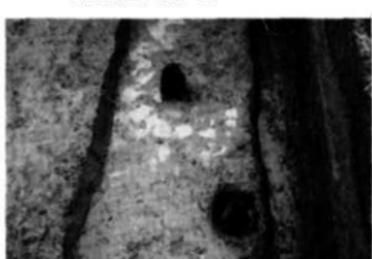
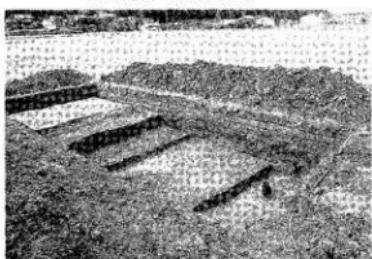


青谷大坪所在遺跡 Tr-19
SK-01 検出状況（北から）



青谷大坪所在遺跡 Tr-20
東壁断面（西から）

図版10





開地谷古墳群 第3トレンチ出土遺物



野坂遺跡 第1トレンチ出土遺物



野坂遺跡 第1トレンチ出土遺物



良田所在遺跡 第1トレンチ出土遺物



2



2



3



4

青谷上寺地遺跡 第1トレンチ出土遺物



1



2



4

鳥取城三ノ丸跡 第1トレンチ出土遺物



—

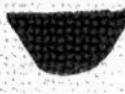


3



5

鳥取城三ノ丸跡 第1トレンチ出土遺物



7



鳥取城三ノ丸跡 第2トレンチ出土遺物



8

鳥取城三ノ丸跡 第2トレンチ出土遺物

図版12



11



12



14

鳥取城三ノ丸跡 第2トレンチ出土遺物



15

鳥取城三ノ丸跡 第2トレンチ出土遺物

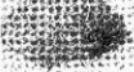


6

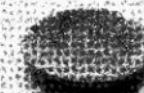


7

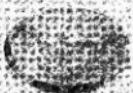
天神山遺跡 第1トレンチ出土遺物



10



8



9

天神山遺跡 第2トレンチ出土遺物



11

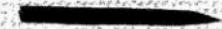


13

天神山遺跡 第2トレンチ出土遺物



2



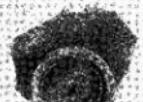
3

青谷大坪所在遺跡 Tr-16 出土遺物



5

青谷大坪所在遺跡 Tr-18 出土遺物



6

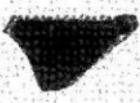
青谷大坪所在遺跡 Tr-19 出土遺物



青谷大坪所在遺跡 Tr-20 出土遺物



青谷大坪所在遺跡 Tr-21 出土遺物



青谷大坪所在遺跡 Tr-21 出土遺物



青谷大坪所在遺跡 T1 出土遺物（平成16年度調査）
年輪年代測定試料

報告書抄録

ふりがな	へいせい17(2005)ねんど とつとりしないせいきはつくつちょうさがいようほうくしょ							
書名	平成17(2005)年度 烏取市内遺跡発掘調査概要報告書							
副書名	開地谷古墳群、野坂遺跡、良田所在遺跡、青谷上寺地遺跡、烏取城三ノ丸跡、鹿野御茶苑所在遺跡、天神山遺跡、青谷大坪所在遺跡、高住鋼錆出土推定地							
卷次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
著者名	前田 均 谷口恭子 藤本隆之 平川 誠 加川 崇							
編集機関	鳥取市教育委員会							
所在地	〒680-8371 鳥取県鳥取市尚徳町116番地 TEL(0857)26-3367							
発行年月日	西暦2006年3月23日							
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号	°	'			
開地谷古墳群	鳥取市 坂底	31201		35°31'30"	134°13'54"	自2005.05.10 至2005.05.16	38.5	墓地公団造成
野坂遺跡	鳥取市 野坂	31201		35°29'3"	134°10'3"	自2005.05.17 至2005.05.18	15.0	携帯電話基地局 敷設施設整備
良田所在遺跡	鳥取市 良田	31201		35°29'44"	134°9'1"	自2005.07.06 至2005.07.07	6.25	墓地造成
青谷上寺地遺跡	鳥取市 青谷町	31201		35°30'55"	134°59'46"	自2005.07.21 至2005.07.22	55.2	工場地内 撤入路敷設
鹿野御茶苑所在遺跡	鳥取市 鹿野町	31201		35°27'34"	134°3'42"	自2005.09.21 至2005.09.27	16.0	携帯電話基地局 敷設施設整備
鳥取城二ノ丸跡	鳥取市 東町	31201		35°30'22"	134°14'19"	自2005.08.02 至2005.10.26	40.0	学校施設整備
天神山遺跡	鳥取市 布勢	31201		35°30'31"	134°10'38"	自2005.09.27 至2005.10.21	42.67	学校施設整備
青谷大坪所在遺跡	鳥取市 青谷町	31201		35°29'47"	134°03'34"	自2005.12.05 至2006.01.31	173.2	保場整備
高住鋼錆出土推定地	鳥取市 高住	31201		35°29'31"	134°9'29"	自2006.02.07 至2006.02.09	2,537	砂質土採取
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
開地谷古墳群	古墳時代	周溝、盛土	須恵器片	古墳1基追加発見				
野坂遺跡	古代～中近世	柱穴、ピット	土削器、須恵器	集落跡の可能性				
良田所在遺跡	古墳時代後期～奈良時代	溝状遺構、ピット	土削器、須恵器	耕作上・盛土中に多量の 土削器片				
青谷上寺地遺跡	近世、奈良・平安時代	溝状遺構	陶磁器、土師罐、木製品	奈良・平安期の遺構?				
鹿野御茶苑所在遺跡	城跡	近代以降	ピット、溝状遺構、 壘石	陶磁器				
鳥取城二ノ丸跡	城跡	近世	壘石、ピット、溝状 遺構	土師罐	豊地開発出			
天神山遺跡	城跡	中世	廻跡	陶磁器、土師罐、土綿	炭化層に伴う土師罐検出			
青谷大坪所在遺跡	集落	弥生時代～中近世	ピット(柱穴)	陶磁器、土師罐、木製品	代の可能性を有する木 製品出土			
高住鋼錆出土推定地	出土地	弥生時代						
開地谷古墳群	古墳時代	溝状の墳頂上に立地する柱穴や土坑等が存在するため、 跡地で確認されている規範とほぼ一致する。跡地で見落としている古墳が存在する可能性もあり、注意を要する。						
野坂遺跡	古墳時代	柱穴等の遺跡から野坂遺跡の西側と考えられるが、標高26.3m以下で古代・ 中世期の柱穴・ピット状遺構が多数存在する。また、古代山陰道が付近を通していた可能性 も考慮されており、当該地および付近の開発等には注意を要する。						
良田所在遺跡	古墳時代	標高3.3～9.3mで2面の遺構(出水から南伏遺構やピット状遺構)を検出ししており、鹿野御茶苑の 可能性などを考慮される。湖山周辺は特殊な性格の遺跡が多く存在しており、丘陵のみなら ず谷筋の崩落にも充分な注意が必要である。						
青谷上寺地遺跡	古墳時代	標高2.5mの現地表から標高6.5mまでの約2.5mは古坟がされている。標高3.3mで近世山陰の排水沟 を検出し、標高0.7～1.1mの黒褐色の粘粒性土層上に土器、木製品、自然木、麻縄物を多く含み、奈 良・平安時代の溝状遺構、溝状遺構の可能性が考えられる。標高1.1m以下については漏水が豊富しく 水没地。						
鹿野御茶苑所在遺跡	古墳時代	丘陵部の陸高地であり、遺跡の立地は好条件だが今回の調査では近代以降の遺構のみを確 認。今後も注意を要する。						
鳥取城二ノ丸跡	城跡	第1トレンチにおいて検出された遺構は近代遺跡であるが、削平された状況は確認されず戸戸 の遺構が包埋されている可能性は充分考えられる。第2トレンチでは江戸期の壁地層と示され る。この層以下で江戸期の土坑・溝状遺構を検出した。						
天神山遺跡		山麓部から削平された河岸の西側に遺跡は存する。左岸に位置する大 坪イカツ原遺跡(Tr.15～17)から右岸の山川川原(Tr.18)に位置すると考えられる木製品を中心とする遺物 を検出した。Tr.16(大坪)大崎手遺跡(Tr.18～22)では、Tr.21において、柱樹が遺存する柱穴を4基 検出した。遺跡の操作跡を把握するためには繊細な試料トレンチの設定が必要である。						
青谷大坪所在遺跡	古墳時代	3箇所ある高住鋼錆出土推定地の内の1箇所である。電波法探査を実施したが、鋼錆と考え られる金属反射を得ることはできなかった。						

要

約

平成17(2005)年度

鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書

平成18(2006)年3月発行

編集 烏取市教育委員会
発行 〒680-8571 鳥取県鳥取市内町116番地
TEL (0857) 20-3367

印刷 総合印刷出版株式会社
〒680-0022 鳥取市西町1丁目215番地
TEL (0857) 23-0651
